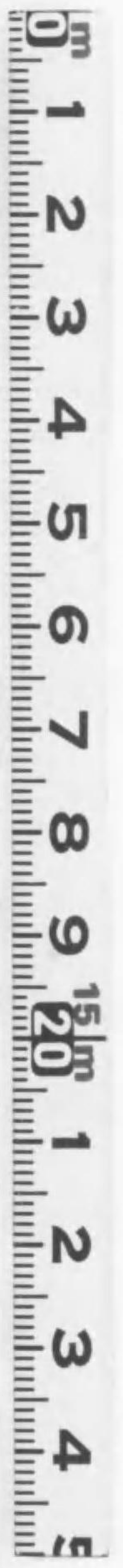


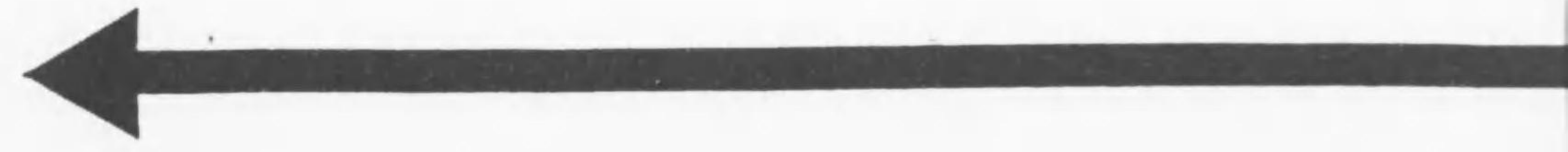
観光の防府



特240
442



始



特 240
442



觀
光
の
防
府



目次

一、はしがき	一
一、市名防府	一
一、史上の防府	三
一、交通の防府	三
▲三田尻驛	四
▲防石鐵道	四
▲省營バス	四
▲防石鐵道經營バス	四
▲市内バス	五
堀口線—問屋口線—同上—西浦線—中關線—	
▲市外バス	五
富海線—小郡線—	
▲貸切自動車	六
▲厚生車 便利車	六
▲三田尻港	六
▲道 路	六

一、觀光の防府……

▲花 曆……

▲市内觀光地……

▲防府天満宮(松崎神社)……

天神山—縁起—社殿造營—祭事—花神子社参式—神幸祭と裸體坊—境内—曉天樓

▲國分寺……

▲毛利公爵家防府邸……

▲周防國衙址……

(附)國慶の門……

▲早害試験場……

▲敷山城址……

▲阿彌陀寺……

▲農民道場……

▲種鶏場……

▲勝間浦……

▲三田尻港……

(附)野鳥……

▲人絹工場……

七

八

一〇

一〇

一八

二〇

三

三

二四

二五

二六

二六

三

三

三

三

三

三七

▲柏木體温計工場……

▲桑山公園……

公園—桑山の名—來目皇子殞殮地—野村望東尼墓—招魂場—

▲放送局……

▲朝生松原……

▲聖蹟……

問屋口—大觀樓—柳邸—

▲中關港……

(附)中關……

▲三田尻搦田……

▲向島製糖工場……

▲專賣局試験場……

▲立岩稻荷……

(附)豆狸—雜魚—蠶區……

▲水産試験場……

▲西浦港……

(附)五ひめあやめ……

▲市役所……

三六

三六

四一

四一

四四

四三

四三

四六

四六

四七

四七

五〇

五一

五一

五一

五三

五三

五四

五四

五四

- ▲古墳……………五
- ▲山陽花壇……………六
- ▲鹽檢定所……………六
- ▲新橋と櫻……………六
- (附)舟橋趾……………六
- ▲その他の史蹟名勝……………六
- 大専坊舊址—圓樂坊址—宮市觀音—佐波神社—茶臼山—越氏塾址—南部伯民舊邸—
老松神社—大平山—有時庵址……………六
- ▲市外觀光地……………六
- ▲玉祖神社(周防一宮)……………六
- ▲富海海水浴場……………六
- ▲佐波川峡谷……………六
- 一、市内神社佛閣……………六
- 一、觀光コース……………六
- 一時間のコース—二時間のコース—半日のコース—一日のコース—半日のハイキングコース……………六
- 一、温泉……………六
- 料亭並食堂—映畫常設館—劇場—遊技場……………七
- 一、土産物……………七

觀光の防府

はしがき

鹿狩る滑の山に、雪が解け、雪解の水に佐波の川風ぬるみ、酒垂山の菅廟に、梅花綻び初めれば、牛替神事の福運目さして、人波が打つ。間もなく、佐保姫の霞の車は、音もなく迂りて、新橋堤には櫻の花が亂れ匂ひ、緑の麥の田圃には、黄色い茶種の花が咲く。

佐波の清流に、皿文け小鮎が、銀箭を振れば、山は漸く青葉が薫り、周防灘には、鱒や鯛の漁期が来る。聽て、火雲盛んに飛んで、鑠石流金の眞夏が訪れ、ば、水色パラソル、カンカン帽、絹の繪日傘、アツバツパー、浴衣姿が、海水浴場目がけて、三田尻驛は、火事場のやうにこつた返す。敷山城址に紅い躑躅が咲いて、建武の昔を偲べば、天満宮誕辰祭と住吉祭の下火花が、晝の暑さを忘れしめる。

×

×

山つみにまつる貢と、秋の山々紅葉かざせば、野は豊年満作に、黄金の稻の波が打ち、畑にはかくの木の実が玉を成す。美々しい社参行列の花神子祭が終れば、關西隨一の裸祭が来る。

時に六花の霏々たるを見ることあるも、所謂銀世界を現出するが如きことはなく、只遠く佐北連山の白皚々たるを望んで、その天恵の温暖を感謝し誇るのみである。

面積一四・七平方里、山紫水明の境、自ら數多の名勝に富み、水陸交通の要衝、夙に文化の華を開いて、山河幾多の史蹟と口碑とを裹み、氣候溫和土地肥沃、天産豊かに生産する。詳しくは、載せて此の一卷に收める。

市名 防府……………ハウフ……………

由来 孝徳天皇大化二年、諸國に國司郡司を置かれ、周防の國府を此の地に定められてから、防府又は府中と稱せられた。防府の地名は、今の防府市區域は勿論、往昔より廣く佐波郡南部一帯の地方を指す稱呼であつた。昭和十一年八月二十五日、防府町・中關町・華城村・牟禮村の二町二ヶ村を合併して、市制を施行し、此の由緒ある地方名を以て、市名としたことは、眞に意義深いことである。
讀方 ハウフ(ホーフ)と讀む。世人往々ボウフと濁音に讀むものがあるが、これは誤であつて、古來土着の防府人は、正しくハウフと言ひ來つてゐるのである。

史上の防府

遑々たる太古のことは知るに由なく、文獻の徴すべきものなきに對して、猥りに臆説を逞うするはもとより採らざる所であるが、幾度か山河の改轉、滄海の變遷を経たりとするも「地は最後の説明者なり」といふが如く、國史發祥の地たる筑紫大和の中間に位し、廣漠たる大平野に、天然の良港を擁して、海陸交通の要衝に當れる防府の地が、その天地夙に開化の光、黎明に輝き初めて、我國上代史

の一舞臺たりしことは、到る處豪族の残せる幾多古墳の散在せるに徴するも、想像に難からぬ所である。

抑々防府の地が、その始めて文獻に現れてゐるは、景行天皇十二年、熊襲御親征に、その策源地となつたことである。次いで仲哀天皇の御西征に當つても、此の地に於て將士を糾合せられたのである。上代の史に周芳沙磨又は沙磨、或は娑婆等とあるは、即ち今の防府の地である。その他來目皇子の殞地、菅公の遺跡等、古き史蹟の數々を存してゐる。

斯く觀じ來ると、防府の地は、先づ海より開けて、漸く陸に及べるものなること明かであるが、その陸に燦然たる文化の華を開くに至れるは、國府の設置に依るもので、それは總て現代防府の基礎を築くに至つたものである。是れ此の地が、山口市の如く主として大内氏時代以後の史蹟、萩市の如く主として明治維新前後の史蹟なると異つて、實に誇るべき幾多の古き史蹟を存する所以である。

戰國時代に至つては、大内、毛利兩氏の防長經略に、此の地がその一舞臺となり、千有三十餘年の昔、土師信貞が松ヶ崎の地に營めるさゝやかな祠を中心に、漸次發達せる宮市は、遂に純然たる商店街と化し、網干のさまも鄙びて一小漁村に過ぎざりし三田尻は、その地理的關係より、一は海運の發達に依り、一は毛利氏水軍の根據地となるに及んで、商家立ちならび、水軍將士の住宅軒を連ねる市

街を成すに至つた。

歴代藩公の開作事業は、廣漠たる鹽田と、多くの美田とを作つて、現代防府の盛大なる産業の基礎を成すに至つた。その間文化益々開けて、文教彌々盛んに興つたことは言ふまでもないことである。而してそれ等の史實が、此の地に幾多特筆すべき史蹟を遺して、今史都防府の名を恣にする所以である。

交通の防府

滔々たる佐波の大河が内海に注ぐ所、縣下第一の廣袤を有する平野を成して、天然の良港を擁する防府の地が、往古より交通の要衝たりしことは、強いて文獻を俟たずとも、單にその地形より見るも想像に難からぬ所であらう。而して内海及山陽道の要衝たる此の地に、國府の置かれるに及んでは一國政治交通の中心地となつたのである。明治に入つて漸次道路を新設して交通に便し、次いで鐵道の敷設を見て、三田尻港の海運と相俟ち、益々交通の至便を來すに至つた。更に省營バス開通し、防石鐵道經營のバス運轉を見るに至つて、茲にいよいよ防府の地は縣下交通の樞軸たるのみならず、山陰

山陽兩道を連絡して、更に之れを九州に連繋する捷路となつたのである。市内に於ける國縣市道の四通八達、市内バスの運轉に依り、市内の交通は至便を極めてゐるのである。今これ等交通機關を類別して記すれば、凡そ左の如くである。

三田尻驛 山陽本線は市の中央を東西に縦貫し、市の陸の玄關たる三田尻驛は、一ケ年乗降客百萬人に近く、貨物發着各七萬噸に及ぶ。客車着發、上り普通十六回、急行八回、下り普通十五回、急行十回

防石鐵道 三田尻驛を起點として、市内に周防宮市驛・ふなもと船本・ひらふら人丸の兩停留所を置き、佐北の中心地堀に至る。三田尻驛列車着發各六回。

省營バス 三田尻驛を起點として、市内に數ヶ所の驛及停留所を置き、市外石田村を経て山口市に通じ、更に萩市に至る。三田尻驛發着各十三回。

防石鐵道バス 三田尻驛を起點として、佐波川の峡谷美を縫ひつゝ石州街道を北進し、阿武郡地福村に至つて、鐵道山口線に連絡する。途中八坂村畠田より分岐して西進し、吉敷郡仁保村に入り、山口線仁保驛に連絡して山口市に至るものと、柚野村下出合より分岐して西進し、仁保に入り、同じく山口市に至る二線がある。

市内線バス 三田尻驛を起點として、左の五線がある

△堀口線 我町、上新町、中市、立市、天神町、野崎、車塚、堀口通等のメインストリートを通つて堀口に至る。――十一往復――

△問屋口線 堀口線同様順路に依り、堀口より更に庚午新丁、百間町を経て問屋口西渡に至る。――四往復――

△問屋口線 驛通、野崎、車塚、堀口通、三田尻本町、高洲、東立登を経て問屋口西渡に至る。――七往復――(夏季八往復)

△中關線 驛通、野崎、車塚、岡村、鞠生町、東立登、東須賀、西須賀、新前町を経て中關本町に至る――十九往復――

△西浦線 赤間、仁井令、伊佐江、赤石を経て新地に至る。――十二往復――此の内七往復は小茅に至る――(以上防長自動車株式會社路線)

市外線バス 左記二線も三田尻驛を起點として運轉せられてゐる。

△富海線 市内車禮線同様の順路を進み、更に沖原、大内、末田を経て富海村に至る――七往復――(夏季八往復)

△小郡線 我町、下新町、今市、徳町、千日町より新橋を通り、石田、大道等を経て小郡町に至る。一六往復一（以上防長自動車株式會社路線）

貨切自動車 賃金左の如くである。

普通型 二キロまで七拾錢 中型 五拾錢 小型四拾錢（市街地） △半日拾五圓 一日貳拾

五圓 △待時間一時間壹圓以上 一時間を増す毎に貳圓五拾錢追加

厚生車便利車 市内に數名の經營者があり賃金は一キロ貳拾五錢 一キロ以上は一キロ毎に貳拾錢

増

三田尻港 市の海の玄關三田尻港には、尼ヶ崎、攝陽の兩汽船が、上り午後十時、下り午前二時半に、毎日交代で寄港する。その他は別項に記する。

道路 二號國道は、市を東西に縦貫して、西は石田村を経て吉敷郡に、東は富海村を経て都濃郡に入る。市内に於ける縣道には、防府三田尻港線・中關防府線・防府津和野線・西浦三田尻停車場線の四線がある。幾多の市道は。これ等縣道に連つて、本市の交通は、眞に文字通り四通八達し、更に幾多路線の新聞を見んとしてゐる。

……(6)……

觀光の防府

鐵道山陽線に依つて上下する旅客が、下は佐波川の鐵橋を渡り、上は富海の隧道を抜け、漸く防府大平原の地域に入れば、忽ち車窓に流れ込むものは、その視線の移動に連れて、展開する海陸一帯さまざまの明媚なる風光であらう。

南には遠く巍然として立てる二大人絹工場の偉觀に續いて、立連る三田尻市街の家並、江泊半島、向島に抱かれて、紺碧の海に日光照り映える三田尻灣の絶景、海上八湮煙波渺茫の間には、仙境野島を點描し、北は遠く秀嶺峰を連ねる天神山、矢筈ヶ嶽、大平山をバックに、繰り展げられる繁華街宮市の市街を見る。

……(7)……

郊外は清流佐波川の恩澤に浴して、美田沃野連り、西泊半島向島に擁せられて、良港中間灣を成し灣に沿うて十州鹽田の最たる三田尻鹽田開け、佐波川河口は、市内西浦及吉敷郡大道村、秋穂町の沿岸を合せて一大港灣を成して、西浦鹽田を抱き、風波靜かなる内海に臨んで、遙か雲煙模糊の間には豊豫の山々を見はるかす。市の中央には靈峰桑山聳え、麓には千年の緑を湛へる鞠生松原の絶勝があ

る。

内海特有の天氣滿朗、四時の氣候溫和に加へて、水陸交通の便は、夙に人文の開化を見、又幾多明媚なる風光を成し、東西三里九町十間、南北二里三十一町に亘る市の地區は、茲に豊富なる史蹟と名勝とを裹むに至つたのである。今その主なるものを紹介すれば、凡そ左の如くである。

花 曆

花嫁、花形、花衣、咲く花の匂ふが如く、美しきが故にいふ言葉である。花心、花残月、散る花の果敢なきが如く、淋しきが故にいふ言葉である。

語に曰く、造花も春を妬むが如しと。春としいへば花、花としいへば春を懐ふ。盡日春を尋ねて春を見ずと。そんな語は、防府には通用しない。春の防府は、正に花の防府である。夏秋冬も亦花。樽前醉を勸めるものはなくとも、花下に歸るを忘れるは、その美景に因るのである。四季を通じて、防府は正に花の防府である。

梅 花信二十四番の魁する花の兄。人々襟帯香を負うて歸る天満宮の梅は、餘りにも名高い。梅花は獨り此所のみではない。嶺梅江梅野梅官梅、到る處に馥郁たる清香を放つが、觀光産業一石二鳥の案から、近年天満宮より東、遠く牟禮山麓にかけて、植栽せられた數千株の梅樹は、今や將に防府北部一帯の地を、暗香浮動の境、萬樹是れ梅花の國たらしめんとしてゐる。

櫻 梅が笑へば柳が聲み、やがて長閑けき春の人心を、騒がしめる櫻の花が咲く。歳々年々人相同じからねど、年々歳々花相似て、植ゑて既に三十年、石ばしる佐波の流に沿うて、延長實に千五百米新橋船本の堤防は、全く花雲につつまれ、水の中にも花が咲く。花はその名に似合ひの櫻町を経て、天満宮境内春風樓前に至り、更に延びて天拜山に續く。正に縣下有數の櫻名所である。

菜花 咲く花は千種ながらに仇なれど、誰か春を恨むものがあらう。されど空蟬の世にも似たるか待てといふに散らでし止まらず、吹く風にしづ心なく櫻が散れば、田圃に菜種の花が咲く。麥の緑の中に黄色い菜種の花が咲く。臘月夜の菜種の花、咽ぶは花の香か人の情か、三十八町歩花の筵。

花菖蒲 到る處の山々に、さ月待つ花たちばなの香を嗅いで、昔の人の袖の香偲べば、やがて菖蒲の花が咲く。町の真中に、血に啼く山杜鵑の聲は聞くよすがもないが、萬花既に地に萎して、地上已に觀るべき花を失つた時、色とり／＼に咲き競ふは、獨り花菖蒲のみである。三田尻驛前山陽花壇は珍種名花五百餘種を集めて、關西隨一の菖蒲園たる名を擅にしてゐる。

楓葉 四時心すべて苦しき中にも、物思ふこと限りなき秋訪れ來れば、踏み分けて鳴く鹿はなけれど、桑山には、山づみに幣と捧ぐる楓の紅葉が散りしく。

潮の花 冬の花、雪は見られぬ暖さである。鷗鳴く沖の潮が打ち寄せて、陸に咲くのが潮の花。三

十五反の帆を捲きあげて、千石船が積出す潮の花。これも亦防府名花の一つである。若しそれ離披不
斷の花に至つては廓の中に、磨きをかけた幾多解語の花がある。

市内觀光地

防府天満宮 (松崎神社)

なだらかに裾をさばいて立てる白砂の小丘、麓より中腹にかけて美しく松の緑の裾模様を染め出す
は、天神山 (一名酒垂山) である。

此の絶景を背景に、その南麓に、防府市街の繁華と防府平野の眺望とを引きまとめて、一段と小高
く丹塗の廻廊を廻らした華麗な社殿こそ、我が國最初の天満宮で、北野・太宰府と共に日本三天神と
稱せられ、關西有數の大社である。四時参拜者絶えることなく、一ヶ年の賽銭その他の社入金一萬圓
に上る。以て如何に賽客の多きかを窺ふに足ることが出来る。祭神は菅原道真公で、此の外に天穗日
命・建夷鳥命・野見宿禰命の三柱が合祀してある。合祀の年月理由等は未詳であるも、凡そ左のやう
に見るのが至當であらう。

.....(10).....



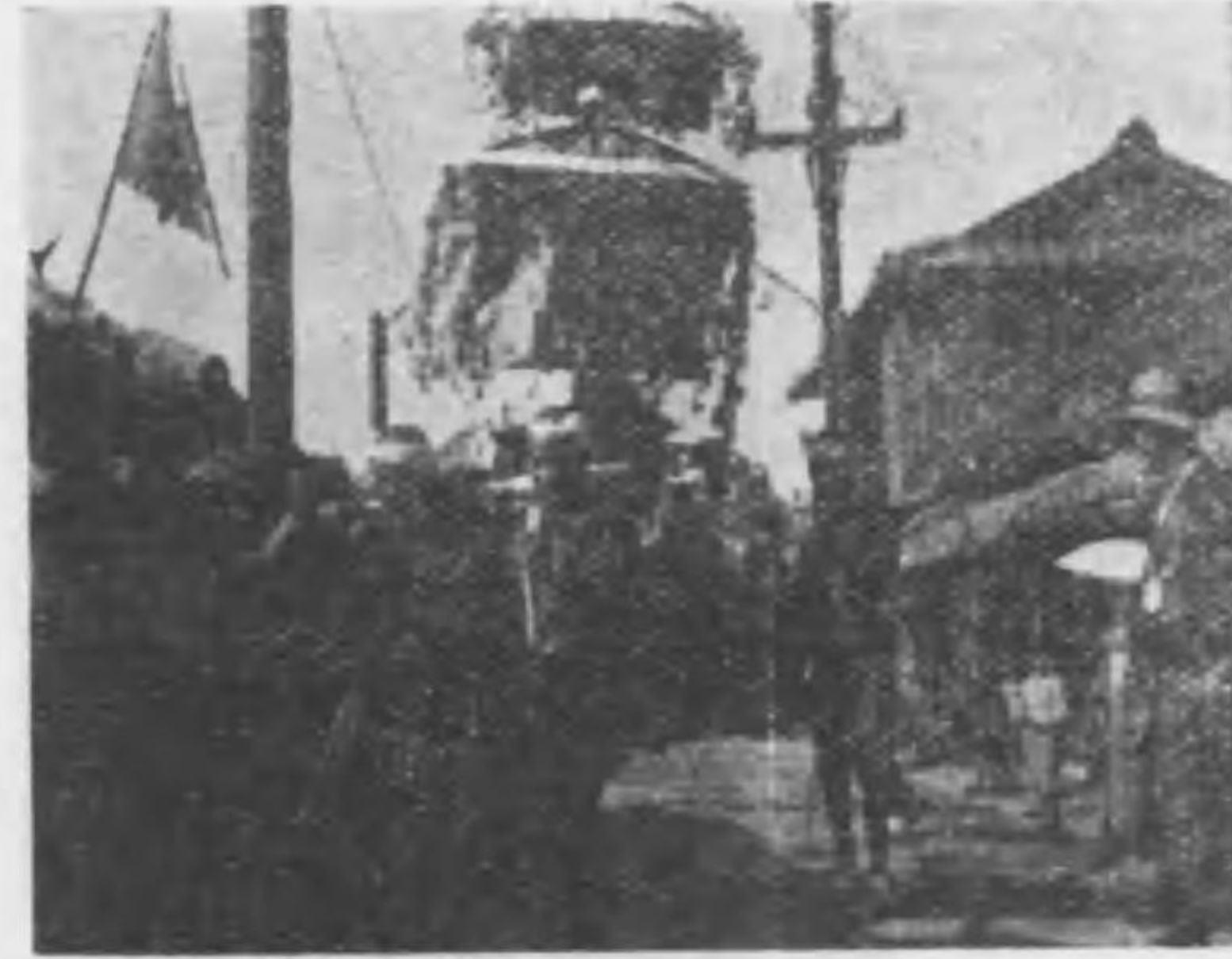
天満宮神社

.....(11).....

娑婆の地に來目皇子の殞殮(桑山の項参照)を掌つたものは、野見宿禰の末孫土師連猪手であつた。爾來土師連は
娑婆連となつて、防府の地に深き縁を結ぶに至り、その氏族は榮え、又土師姓の人々は、國府の役人として多數
土着した。故にこれ等の氏族は小祠を立て、その祖神たる天穗日命・建夷鳥命・野見宿禰命を祀つてゐた。そ
こへその末孫菅公を合祀するに至つた。

同社縁起に依れば、延喜元年正月二十五日、太宰府配流の宣下を蒙つた菅原道真公は、西下の途次

二月中旬、船を勝間浦に繋ぎ、同族の周防國司はじのつよとせ信貞を訪うた。信貞は急ぎ公を國府の館に迎へ奉り、痛くその容體を憐みて歎待したが、一日公の心の悩みを慰め奉らんと、風光絶佳の松ヶ崎の地に遊覽を申出た。老木枝を交へて奇しき松ヶ崎の前面には、周防灘の波輝き、江泊・向島・中浦・桑山



花 神 子

の諸島の浮べる妙なる景色に、公は日頃の悩みも、暫しは打ち忘れて、風景を賞美した。「我れ若し筑紫に命を終るとも、魂魄必ず此の地に歸るべし」とは、その時の公の言であつた。延喜三年の春、神光勝間の浦の海上に現れ、瑞雲酒垂の峰に棚引いて、奇異なる瑞相を化現した。間もなく、公、二月二十五日薨去の旨が報ぜられた。信貞は悲嘆の餘、公山上曾遊の言に従つて、翌延喜四年、松ヶ崎の地に神廟を營みて、菅公の神靈を祀り、之れを松ヶ崎の社と號した。即ち松崎神社の創始である。

社殿は延喜四年の草創より二百八十年の後、元暦元年、後鳥羽天皇建久六年、東大寺再建落成の御禮として、周防

國司職阿彌陀寺大和尚しんじやうほう俊乗坊重源上人造營し、それより百四十餘年を経て、元徳二年炎上し、その後三十六年間假殿の儘に年を経て、貞治三年、大内弘世三建を企て、翌四年本殿を上棟し、その後十一年目の永和元年、いよゝ造營を終り、同四年大内義弘、樓門及東西の廻廊を建立し、應永八年、大内盛見三重塔婆鏡樓等を建立し、大内持世壇蔓埒石を寄進し、大内教弘の時に至つて、漸く結構残る所なきに至つた。その後大永六年、類火の厄に罹つて、悉皆炎上し、神殿は再び假殿の儘に五ヶ年を経て、享祿三年、大内義隆勅許を得て四建、その後毛利隆元之れを修造した。現在の宏壯なる社殿は、その後二百五十九年を経て、天明九年（昭和十六年より百五十二年前）毛利重就の造營に成るものである。多數の年中祭事の中でも、二月の節分祭は牛替神事に、三月九月各二十五日の春秋祭は相撲に賑ひ、五月十五日の金鯉祭、輪取に名高い六月三十日の御田植神事並名越神事を過ぐれば、奉納學童清書と花火に賑ふ八月三日より三日



花 神 子

間の誕辰祭、次いで古風床しい花神子祭、裸體坊に知られた陰曆十月十五日の神幸祭等は、普く人の知る所である。

△花神子社参式 神幸祭奉仕の代行司並に小行司が、滯りなく奉仕の終らんことを祈願の爲め、新穀を以てせる一夜造りの豊御酒を奉る古式である。花神子、お局を始め十名の官女、先乗・武家・御酒奉行・典醫等は、何れも四五歳乃至十一二歳の愛くるしき少年少女のみで、お手廻の役は、近年松崎青年團員及官市藝妓参番の若手美形連中が奉仕することゝなつた。すべてを王朝時代武家時代に則る美々しい服装調度に、蜿蜒たる古式行列が、僅々十數町の道程に、三時間餘を費して繰り歩む優美典雅のさまは、正に古代繪巻を繰りひろげたるが如くで、人をして恍惚として今の世に在るを忘れしめるものがある。



花神子

……(14)……

△神幸祭と裸體坊 大小行司の供奉に依り、神輿を奉じて、菅公上陸乗船の地、勝間の浦の所謂御旅所に神幸し奉る祭禮である。冴え渡る寒天満月の下、神輿を護つてワツシヨ／＼の掛聲も勇しく、萬餘の裸體坊が、交

る紅丸提灯の影も美しく、蜿蜒白蛇の長列をなして進むさまは、眞に壯觀の極みである。關西有數の大祭として知られ、露店商人香具師の入込む者千餘を數へ、遠近よりの参拜者數十萬に及び、一日の賽錢三千圓を超える有様である。



神幸祭

境内には、松ヶ崎天神縁起(相良遠江守書、土佐光信書)大日如來坐像の國寶を始め多數の寶物を所藏する寶物館を始めとして、觀音堂・春風第一樓・松崎文庫・曉天樓等がある。神苑は廣袤九萬坪に亘つて、一大公園をなし、殊に背後の酒垂山は眺望絶佳、鐘秀・崇高・擬美(一名清涼臺)の三臺があり、近年更に數本の登山道路と數ヶ所の展望臺とを新設し、その他防長海軍忠魂碑・酒垂岩・屏風岩・金烏玉兎の瀧等の名勝がある。

△曉天樓 維新前尊王討幕の志士が密會して、謀議を凝した記念家屋である。樓は神社より西一町餘、老松偃參として、薫風自ら神清く、白砂水に洗はれた鐘秀亭下、梶原景時の遺屋を

……(15)……

移したと云はれる木鐘庵に近く、庭園を作り竹垣を結び廻らした中に立つてゐる。

此の樓は、もと宮市前小路南側の藤村旅館の中二階で、大正三年之れが保存の爲め今の地に移築したものである。上は六疊二室となり、下は漬物部屋薪炭部屋に充てたもので、二階の窓が小格子作りで、一見倉庫のやうに見え、二階の段梯子は押入の中に在るので、敷多い朝夕出入の旅客の注意を免れて、志士の密會所としては、屈竟の場所であつたらうと想像せられる。

座敷の床柱には、烈士の劍舞のあと鮮かに、刀痕を留めてゐる。その床柱に續く袋戸棚の四枚の戸には、坂本龍馬の書と云はれ、筆蹟美事に、左の文字が讀まれる。

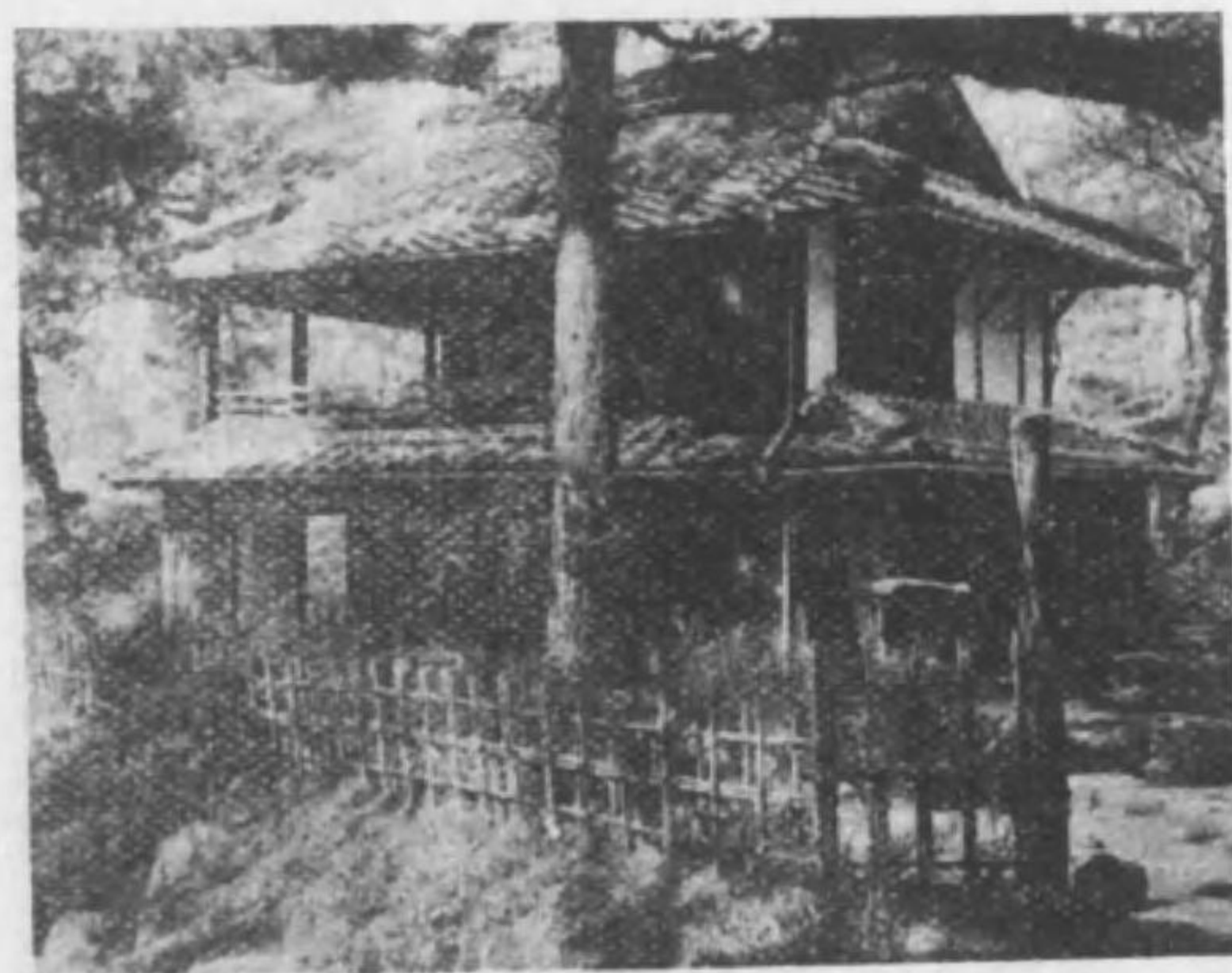
あし邊行鴨川あたり青柳の亂るゝ糸の心地して驚さへ知ら

ぬ水底の深きわたしの胸の中誰に語ろかしらせうか實にやるせがないわいな

録古人歌

これは北の戸に書かれたもので、北より二枚目の戸には、蟹の繪が二三匹かゝれて、その上に

世の中は縦に目がつき横に這ふ



樓 天 曉

.....(16).....

昔間の蟹の淺ましの世哉

と、洒落書にしてある。此の戸の裏には

三尺の霜より光る玉なれど

誰しも磨く人なかりけり

の一首が書かれてある。筆力奔放、坐ろに當年志士の面影を偲ばしめるに足るものがある。

三枚目の戸には、芹の葉のかたに

明月清風是故人

その裏には

面白き事を始めて宮市の

長き御客は藤村樓の客

四枚目の南の戸には

作詩不欲尋常詩人

放驗瀧腹此經綸

飲酒不欲尋常酒客

一醉其中蹴兵戰

龍書

とある。次の戸の裏には

.....(17).....

仰ぎ見る程高き適義樓

花の盛りの藤村屋可南

と、狂歌がある。書院窓の柱隠しの表は、某といふ人の眞面目な和歌で、手もやさしく書いてあり、裏には頗る豪放な書き振りで

むかしわが波にゆられて浮寝せし

周防の海の北泊見ゆ

吟松

とある。右の外、襖などに澤山の落書があつたが、維新前後に、藤村屋の主人が張り直したり、又は人に頒けたりして、今は少しも残つてゐないのは、遺憾の至りである。別に此の樓の寶物として、高杉東行遺墨に

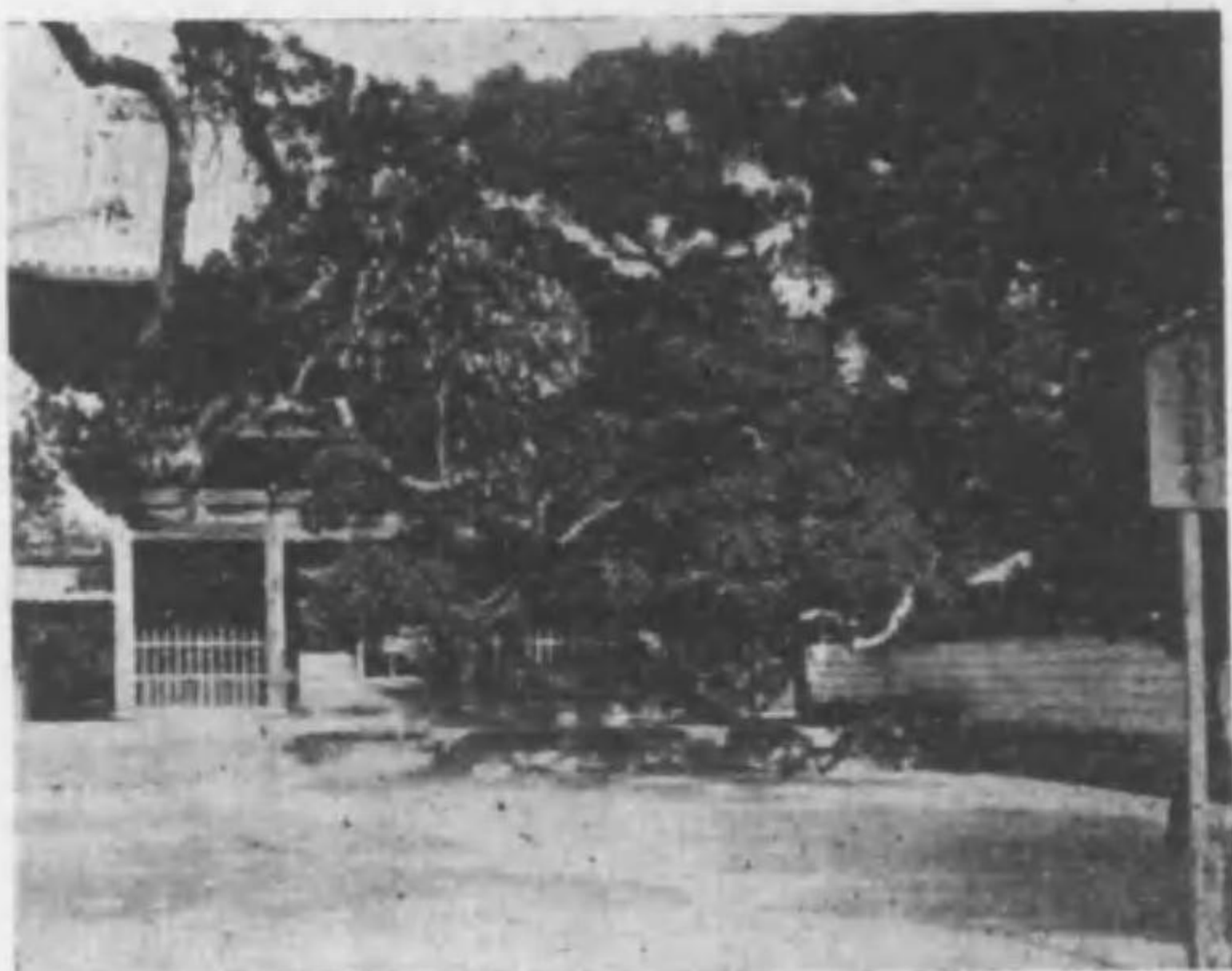
昔忘れて榮える葵

今に刈りとる菊畑

と認めた扇面の一軸と「眞性」の二字の額とがある。その他山縣公爵、楫取男爵の曉天樓記の額が二枚ある。

國分寺

後に多々良の翠巒を負ひ、前面遙かに三田尻灣の絶景を望んで、高く白塀の垣を廻らす中に、巍然



國分寺

として立つ大伽藍は、聖武天皇勅願所國分寺である。今はその規模を縮少したとはいへ、諸國國分寺中、當寺の如くその舊趾に儼然として名残を止め、而も多くの寺寶を藏してゐるものは、殆ど他にその類例のない所である。

當國分寺は、天平九年の創立、開基は行基菩薩で、爾來千二百有餘年、昔は寺領も頗る廣大で、今の數倍にまさる大伽藍を擁してゐたが、今はたゞ仁王門・金堂・聖天堂を殘すのみとなり、寺領も田畑山林合せて五十餘町歩となつてゐる。多數の寶物中、國寶となつてゐるものは、後奈良天皇勅筆心經一卷で、國寶指定濟みといはれるものに、大日如來の金像（作者不詳）不動明王の木像（覺鍛上人作）

阿彌陀如來の木像（安阿彌作）があり、その他に著名なるものは四天王（平安時代の作）本尊の脇立たる日光菩薩・月光菩薩（奈良時代の作）等である

抑々國分寺は、聖武天皇の勅願に依つて、天平九年より釋迦如來の像を造り始め、同十三年より同二十年まで

の間に、全國に造立を畢つたもので、僧寺と尼寺とに分れ、僧寺は金剛明四天王護國之寺と號し、金光明經を講説して、四天王の擁護を願ひ、國分金光明寺・金光明寺・金光明護國寺・國分僧寺ともいひ、尼寺は法華滅罪之寺と號して、法華經を講説し、法華滅罪寺・國分法華寺・法華寺とも稱した。

當國分寺は、古の僧寺で、本尊は勿論最初は釋迦如來であつたが、何時の間にか、今の如く藥師如來に變つた。多分火災に依つて、釋迦の佛像が壞滅したので、その後へ藥師如來を持つて來たものであらう。尼寺は程遠からぬ所に在つたものと思はれる。今多々良中學下の法華寺は、明治十六七年の頃、舊趾に再興し、その後今の地に移轉したもので、今は僧寺となつてゐる。

毛利公爵家防府邸

前面遙かに眞帆片帆の行き交ふ周防灘の長閑なる景色を望み、廣き田圃を眼下にして、點在する賤家が安らかに抱き、多々良山麓高敞の地、幽邃の境を占めて、自然の美に加ふるに人工の妙を以てせるは、我が防長三十六萬九千石の舊藩主公爵毛利家の防府邸である。

傾斜せる小砂利の大道を、兩側の植込みの風趣を賞しつゝ歩を運んで、壯大なる冠木門を入れば、亭々たる喬木柯を交へて、山氣陰森たるを覺える。深谷幽靜のあたりを過ぎて、右に折れて左、山腹

に榊別邸を見ながら進めば、本邸の前に至る。樓閣殿堂、精巧にして壯麗である。邸内全部が一大庭園を成してゐるが、流泉潺湲として庭際を環遶し、池泉に臨んで亭榭花石を置ける繊細にして而も壯大なる本邸並前栽の美は、筆舌のよくする所ではない。

本邸 本邸の建築は、明治二十五年、既に此の地をトシたが、偶々日清・北清・日露の戦役相續いて起つたので、一時建築を見合せて、大正元年八月着工、五ヶ年の長き日子を費して、大正五年八月竣功したものである。大正五年秋十一月、筑豊の野に陸軍特別大演習を御統監遊ばされた大正天皇は、御還幸の御途次、新築落成の本邸を以て、行在所に充てさせられた。大正十一年三月には、皇太后陛下福岡市外香椎宮に御參拜の御途次、本邸を御駐泊所となし給うた。

榊別邸 榊木の水に臨んで建てられた故に此の名がある
明治四十四年十一月、福岡縣下に於て陸軍特別大演習の行



毛利公爵家防府邸

はれた際、明治天皇御統監の御往還御途次、此の邸を以て行在所に充てさせられた。昭和九年十一月一日史蹟として、文部省より指定せられた。

椰の水 往昔椰の木があつたので、此の樹に因んで名づけられたものである。往古征韓御發向の神功皇后が金切宮（今の佐波神社）の祭祀を終へさせられて、此の流水に御薙刀の刃を洗はせられた所で、中古九州の國主が、參府の節は、必ず此の水に刀鎗の刃を洗ふを例としたものである。蓋し水極めて清らかで、一度刃を洗へば向後決して錆蝕しないからである。此の水が茶の湯に用ひられたことは、更にそれ以上に有名である。此の水を用ひた茶は、特別の味があると言はれる。

周防國衙址

東佐波令字國衙の地に在つて、今は一基の記念碑に、往古榮えた國府の面影を偲ばしめるのみで、四面みな田畑とはなつてゐるが、國廳の址も土居八町の區域も、今猶判然と之れを知ることが出来る實に全國唯一の貴重な史蹟である。

抑々氏族制度を廢して、諸國豪族の土地私有を禁じ、郡郷制度を立て、各國に國司を置いた大化改新の新制度も、武家の世となつては、國司はあつても名のみで、一王朝時代のやうな勢力はなかつた



國廳碑

次いで戰國亂離の世となつては、遂にその跡を絶つに至つたのである。

斯くして嘗ては一國の治府として燦然たる光を放つた防府の地も、世の推移と共に漸く昔日の影を没して、一帯の地沈滞の氣に滿ち鈍色の低雲に蔽はれるに至つた。偶々東大寺再建のことがあつて、周防の租賦を以てその造營の資に充てられ、俊乗坊重源上人、任を受けて來任し、周防國司の職務を管掌した。而してその偉徳に加へるに、東大寺大勢力のバックを以てして、守護地頭の新勢力に對抗し、能く國廳の權威を保ち、國府としての面目を維いだ。爾來法胤縮流相繼いで國務を執つて、大内氏末葉の頃までに及んだが、而も東大寺支配の國領たる土居八町の地域は、時に盛衰變遷はあつても、永くその所領たるの形式を存して、武家の侵入を許さず、儼然としてその威嚴を保持し、明治に至るまで、その地域内に於ては、國廳の舊例故格を存してゐたのである。

昭和十二年六月十五日、文部省より「周防國衙趾」として、大字東佐波令字國廳・大番・朱雀・木船・御徳分・京慶・下り・流田・公下・一濱口・堂前・大樋・下大樋・船所・濱宮の十五ヶ所が、史蹟に指定せられた。指定地積は民有地百二十九筆内實測九町三段四畝二十七步五合八勺、外に右地域内に介在する道路敷及水路敷である。今指定の十五ヶ所に就て、その概要を説明すれば左の如くである。

國廳・大番・朱雀・木船・御徳分の五ヶ所は、今の國衛公會堂を中心に連續する一劃の地で、往古國廳舎のあった所である。

京慶・下り・流田・公下・一濱口の五ヶ所は、國衛土居八町の四至で、京慶はその東北隅、下りはその西北隅、流田及公下はその西南隅、一濱口はその東南隅である。

堂前・大樋・下大樋の三ヶ所は、八町土居の殘存物たる所謂大樋土手の一部である。此の中堂前は十歩を大樋は十歩二ヶ所を、下大樋は道路敷及水路敷を保存に特定せられてゐる。

船所は國廳の官船を繋留した所で、今は田地となつてゐる。濱宮は別項に詳記する。

△國廳の門 國廳は何時しか國廳寺といふに至つた。僧を置くのではなく、廳奉行以下諸役があつて、國廳の様式を執行し、法務は別に安樂寺・東昌院・寶林寺の三刹があつて、之れに當つた。國廳寺は相當ぼろ／＼に

なつて、明治初年まで存在した。市内前小路武光家の本門は、此の國廳寺の正門（東向）の北に在つた通用門をその儘移築したものである。これこそ現實に見る國廳の昔床しい形見である。武光家は管公の同族周防國司土師信貞の末裔であるが、此の國廳寺の門の移築は、その家柄とは關係なく、明治三、四年の頃、武光家の門が古くなつて、改築の要に迫られたので、公卿の家の門とは様式の異なる寺院式の國廳の門を購入して移したまでのことである。尙國廳寺の正門は、今阿彌陀寺の山門となつてゐるのだが、それであると云はれてゐる。

早 害 試 験 場

昭和十四年西日本を襲つた大旱魃は、水稻の早害防止に關する試験研究の必要を痛感せらるゝに至り、翌十五年農林省では山口・福岡・兵庫・香川の四縣下に、早害試験場を設置することとなり、此の中規模最も大なるものを、防府市岩畠の地に設置することに決定し、昭和十六年六月、山口縣農事試験場防府試験地として、諸施設を完了した。試験用建物「硝子の家」は實に此の種施設の全國唯一のものである。主として稲作早害に關する各種の試験研究並一般耕地床締試験を行ひ、殊に如何なる旱魃にも堪へ得るが如き水稻と陸稻との中間品種を造り出さんとして、不斷の試験研究が續けられてゐる。

敷山城址

矢筈ヶ嶽八合目に在つて、建武中興忠臣戦死の地である昭和十年六月七日、文部省より史蹟として指定せられた。今は城址に敷山靈祠を祀り、多数の櫻樹を植ゑ、参道を開いて城址近くまで自動車を通ずる。

九州に敗走した足利尊氏は、菊池武敏等を多々良濱（福岡市外）に敗つて、九州地方を風靡し、延元元年五月、海陸兩道より京都をさして攻め上つた。周防の官軍に、大内弘幸の弟弘道があり、石見の官軍には、小笠原藏人三部長光・播磨助房等があつて、防石二州の間に活動した。

此の時、周防國廳の小目代攝津助公清尊、同廳の檢非違使助法眼教乗は、兵を率ゐて敷山城に立籠り、賊軍に抗した。尊氏の部將丹後但馬石見の守護上野左馬頭頼兼は、眞尾峠・畑峠より攻め上り、藝州の住人吉川恒明は、浮野峠より大手に攻め寄せ、長州の住人永富季有も、亦大手より攻め寄せた。



敷山城址記念碑



敷山城址

地は一夫萬夫に當る天險ではあるが、衆寡敵せず、遂に弓折れ矢盡きて、清尊・教乗始め、一城悉く無限の恨を呑んで護國の鬼と化した。時に延元元年七月四日（陽曆換算八月二日）であつた。

爾來慘風悲雨六百年、忠士死して山河あり、一帯の地藪澤に埋れて、纔かに當時の面影を殘礎に偲ぶのみである。今城址に立てば、松籟徒らに千年の恨を傳へて、山峽の群岩は雲霞の敵兵押寄せるが如く、林中の躑躅は滴々勇士の血の如く、林間の蟬聲啾々として鬼神の咽ぶが如くである。

敷山は矢筈ヶ嶽一帯の地名で、城址は現觀寺の址である昔武士が寺などに籠つた場合、稱して城といつたことがある。敷山城亦然りである。

寺は南方に面して、十二宇の脇坊が建てられてあつた。今俗に十二壇と稱するは山腹を開いて十二段の平地が作られてあるからである。参道盡きて、自動車を棄て、城址に進めば、下段入口と見るべき所に、高さ四尺幅二尺厚さ一

尺五寸許りの岩が、南面して立つてゐる。何か文字が刻してあつたものであらう。更に登れば、儼然として残存する山門の礎石を見る。附近に一つの碑がある。鏡面全く風化して、微かに痕跡を留めるのみで、その何の文字たるかを認めることが出来ない。

更に歩を上段に運べば、幅二間高さ一間厚さ一間位の、大岩が立つてゐる。梵字岩といふ。中央に「観音」の二大梵字を刻し、之れと並んで小輪廓を描いて「金輪聖王天長地久」の八文字を刻し、左側輪廓内には「建〇二年五月〇日」の文字が見える。(〇は文字不明)

現觀寺は、もと驗觀寺といひ(寶永年間改稱)國分寺の末寺で、觀音の靈場周防二十二番の札所であつたが、元龜二年、山麓に移し(今その址がある)明治の改正に、木部の大光寺、多々良の期山寺、岩畑の雲岩寺と合せ、今の岩畑の極樂寺となつたものである。

阿彌陀寺

造東大寺大勸進兼周防國司職俊乗坊重源上人が、東大寺再建の大任を果して、後白河法皇の御冥福祈願の爲めに建立した名刹である。

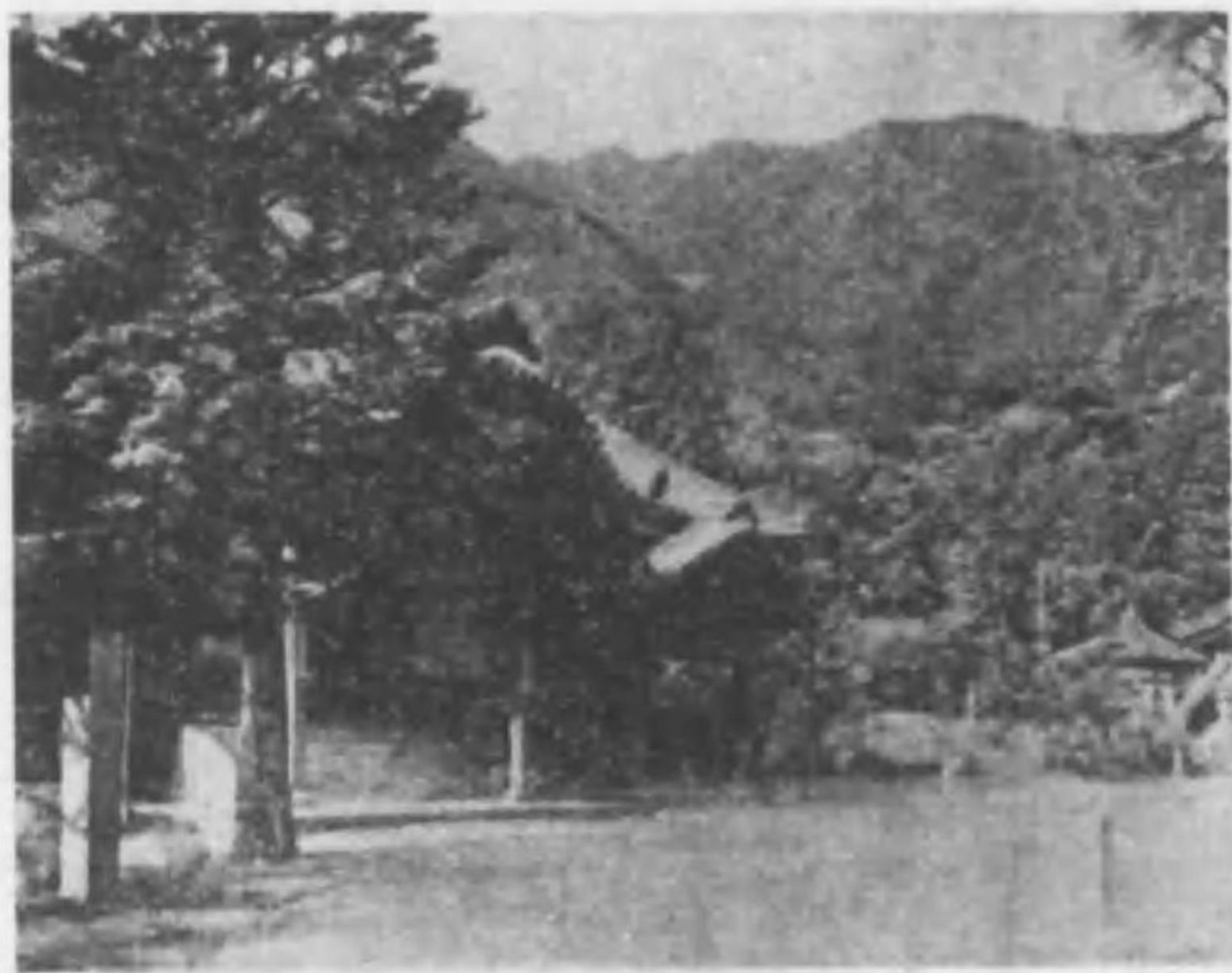
治承四年四月二十八日、南都東大寺は、平重衡の兵燹に罹つて炎上した。後白河法皇は東大寺再建

を詔して、旨を源賴朝に傳へ給うた。賴朝は周防國を以て造營料國となし、令を俊乗坊重源に下した

重源は山城の人、紀長谷雄の後裔季重の男で、俗名を重定といつた。十三歳の時、出家して醍醐寺に入り、俊乗坊に住して眞言の教義を修めた。後轉じて黒谷の源空に師事し、專修念佛を受けて、阿彌陀佛と號した。仁安二年、入宋して修業し、翌三年九月、榮西と共に歸朝して、再び醍醐寺に住した。

重源は周防國司に拜任するや、文治二年四月十日下向した。早くも四月十八日には、宋人陳和卿・番匠物部爲里・櫻島國宗等十餘人を従へて、佐波川上流に上り、柚山を定めて、直ちに柚始めをした。

用材の選木伐採運搬には、深山大谷數里の間を駈廻つて、或は溪谷を埋めて平地を作り、或は岩石を碎き、雜木を伐り、荆棘を除いて、以て道路を開き、橋梁を架し、或は堰を設け、舟楫を造る等、その艱難辛苦は、到底今日吾等の想像も及ばぬ程のものであつたやうである。



寺 陀 彌 阿



阿彌陀寺國寶

即ち材木は短きも七丈、長きは十丈、棟木の如きは十三丈にも及び、その口徑は何れも五尺を下らぬ大木巨材のみであり、之れを曳く綱は徑六寸、長さ五十丈といふ驚くべき程のもので、之れが爲め周防國の葛蔓は採り盡されてしまつた。木遣りの人夫は千人を要し、後に轆轤を用ふるに至つても、猶且つ七十人を要し、一木の搬出に米一石の懸賞を行つた程である。

此の艱難に加へるに、更に重源をして難苦を嘗め

しめたものは、鎌倉幕府の新制度に依る莊園の守護地頭等の暴虐であつた。彼等は幕府の威光を笠に被て、或は官庫に納めた人夫の糧食を奪ひ、或は農時の最中に人民を集め城廓を營んで、以て人夫の募集に支障を來さしめ或は鹿狩鷹狩を行つて、材木の伐採運搬を妨害したのである。

此の如き自然的障害に加へるに、人爲的障害を以てして、而も遂に能く之れを克服して、その大任を果すことが出来たのは、全く重源の偉徳と不斷の努力とに依るもので、東大寺は文治五年再建を了り、建久元年十月十九日、上棟式を擧げ、同六年三月十日竣功大供養を營むに至つたのである。文治二年採木に着手してから、茲に至

る正に十年である。

斯くして萬難を排し、あらゆる障害と闘ひ、遂に東大寺再建の功は竣へられた。附託の光榮、大業の成就に、歡喜の涙に暮れて、先づ俊乗坊の胸裏に去來するものは、果して何であつたであらうか。一寺を興して、永く佛法擁護の叡慮深き法皇の御冥福を禱奉らんとすることであつたであらう。天満宮や玉祖神社の造營も、東大寺落成の御禮であるが、國府から見はるかす翠岱色濃き枳部山の勝地、先づその眼を奪うて、そこに大堂の建立を見たのが當華宮山阿彌陀寺で、文治三年開發し、建久八年竣功を告げたのである。爾來法燈相繼いで、七百五十有餘年、その間幾變遷を重ねても、昔ながらに遠く塵園を離れて、幽寂の境にそより立つ大伽藍には、不斷の香は焚かれ、常住の燈はかゝげられて魚橋楚唄の聲絶ゆることなく、法皇の御冥福が禱り續けられてゐるのである。

當寺の住職は、開山上人以來約三百年間、文明年中まで四十五世の間は、勅令を以て拜任し、周防國司職を兼ね、名僧智識の來住したものが多かつた。毎年七月十五日の開山忌は、遠近よりの參詣者多く、頗る賑ひを呈する。東大寺造營の巨材に押捺の山奉行橋奈良定の用ひた鐵の刻印は、訛つて國威と稱してゐるが、後に奈良家から右田侯毛利就重に傳はり、更に毛利家から當寺に納め、同じく當寺所藏の重源作多寶十三輪鐵塔・俊乗坊坐像と共に國寶に指定せられてゐる。

因に重源が巨材を筏に組んで佐波川を流すに當つて設けた關水即ち堰は、その數百十八ヶ所に及んだが、佐波郡八坂村宇船路に残存の一つが、昭和十二年六月十五日、文部省より史蹟に指定せられた。防府地方及佐波郡内には、重源に關する多數の遺蹟又は口碑があり、佐波郡及防府市全部が東大寺再建に關する史蹟といつてもよい程である。

農民道場

農村更生の中堅人物養成の大使命を帯びて、昭和九年秋設立せられた山口縣立牟禮農民道場は、大平山麓のスロープ、大防府平原を一陣の裡に收める勝景の地を占めて、縣下唯一の道場である。境は往昔俊乘坊重源開拓の地で、西に近く建武中興忠臣戦死の敷山城址を控へ、前面遙かに舊藩公開作の勝間・自力等の美田を望む。此の無言の教訓に、古人の業績を偲びつゝ、選ばれた青年達が、眞の農民魂を練磨すべく、日夜汗と膏の勤務に精進する様は、觀るものをして自ら頭の下るを覺えしめるものがある。實習地として、水田八町六段歩、畑地四町歩、山林二十町歩、果樹園四町歩、牧草地一町歩を有し、多數の牛・馬・羊・豚・兎・雞等を飼育してゐる。又同場は昭和十三年より、國策滿洲農業開拓移民及早期入植移民の各本縣要員の訓練にも當つてゐる。

種雞場

縣下飼雞の資質の改善、産卵能力の向上を圖つて、雞卵増産に資する目的を以て、農民道場に近く

大平山麓の勝地を占めて、昭和十四年設置の山口縣種雞場は、此の種施設の縣下唯一のものである。

種雞の飼養管理改良蕃殖並育成、當業者に對する種雞種卵種雞の配附、團體並當業者の依頼に依る産卵能力の檢定飼養管理の改良蕃殖並孵化育雛及飼料作物の栽培利用に關する試験研究等を事業とし、場用種雞の更新並配附種雞育成の爲めに、場用種雞五百羽（雄雞五十、雌雞四百五十）を飼養し、之れに依つて、春秋二季に約三萬五千個の採卵を行ひ、一般當業者に對し、年間種卵五千個初生雛一萬五千羽、中雛二千羽、成雛二百五十羽の配附を標準としてゐる。



山口縣種雞場

勝間浦

勝間は和名類聚鈔に載つてゐる郷名である。周防國司清原元輔は、勝間の浦で子の日の遊をなし、その歌が遺つてゐる。今の勝間は一小部分の地名となつてゐるが、昔は警固町のあたりから岸津の西邊までが勝間で近代までそこは波打際であつた。今その大部分を鐘紡工場の敷地にとつてゐる勝間開作は、安永五年、毛利重就の築造に成るものである。

濱の宮 日本書記及豊後風土記を按ずるに、景行天皇十二年、熊襲御親征に際し、その九月、龍舟を勝間浦に寄せ、將士を糾合せられた。熊襲平定の後、祠を此處に創めて、田心姫命外七神を祀られた。地に勝間と名づけ、祠を最初勝間宮と稱したのは、戦捷に因んだものである。後に此の祠を防府總鎮守濱の宮五社大明神と稱へてゐたが、明



勝間浦

治四十年、全國社寺整理の際八幡宮・日枝宮と共に金切宮に合併し、今は數株の老松と一基の記念碑とに、その名残を留めてゐるのみである。

御旅所 濱殿といふ。延喜元年正月、東風吹かば云々の三十一文字を名残に、遙々筑紫左遷の菅公が、その二月下旬、舟を此所に維ぎ、溜滯數月、酒垂山上に美なる哉山川云々の一語を残して、五月の望、再び此所に舟を維して、西下の途に就いたと傳へられる地で、松崎神社の神幸祭に、神輿を奉じて至るは、即ち此の地である。枝を交へて廣く空を覆ふ老松の滴る露の光にも、あはれ悲みの瞬があり、道を隔て、梅の老木を映す池の面にも、ありし憂世の姿が浮んで、そゞろ哀れさを催させるのである。

警固町 此のあたりはもと墓地であつたが、慶應年間、三田尻港が毛利氏水軍の根據地となるに及んで、開墾して警備の吏を置いた所である。その任には村上氏が當つた。此所はもと都濱といつたが水軍將校が住むの故を以て、警固町と改めたのである。警固町の西南數町、局の内・福聚町・中福聚町・北福聚町・高橋山一帶の地は、明治維新に至るまで、毛利氏水軍御舟倉の所在地であつた。

三田尻港

江泊半島と向島とに圍まれた天然の良港で、風光亦絶佳である。本港は往古より内海航路の要衝に當り、未だ鐵道の設けがなかつた當時の地方貨客は、みな本港を経て各地に轉送せられてゐたもので鐵道敷設後も、今猶地方の要港として、その機能を發揮し、山口市・萩市・阿北・吉南への貨物は、多く本港を経て移入せられてゐる。最近の統計に依れば、一ヶ年の出入船舶約三萬五千隻、貨物發送約二萬艘到着約二十萬艘、乗降客二萬人に及んでゐる。

築堤は、幅員十四間、延長三百四十間に及び、明治二十四年、貞永忠治等四十二名が出資築造したもので、同二十六年三月より使用し始めたものである。之れが築造の目的は、同港の天賦的價値を高めると共に、中關港の繁榮を奪取せんとするに在つたものである。築造後は旅館運送店等軒を並べて一時殷盛を極めたが、その後鐵道の開通に依り、漸次堤上の繁榮を失ふに至つた。

勝間開作・大開作・三田尻鹽田を始め、その他の諸開作がなかつた時代の三田尻港が、如何に面積廣く水深深き良港で、内海航路の要港であつたかは、想像に難からぬものがある。

△野島 三田尻港より八海里餘に位する孤島で、一名西島といふ。多く鰯を産じて、開花の候には、全島眞紅の色に包まれるからである。戸數二百餘、千餘の住民は、漁業を以て生業とし、遠洋漁業に従事するものも多數に及んでゐる。島は徳山海軍要港部區域に編入せられてゐる。

本島の起原に就ては、據るべき文献なきも、六、七百年の昔、富海石川家の一族板村氏が開拓したもので、その後武士の世を遁れたものが來り住み、板村氏と共に本島の基礎を作つたものであると傳へてゐる。往時は石丸板村・西山・瀨口・雜波・松本・古城・阿部を八軒棟といひ、交代を以て本島の主となり、豊臣秀吉の朝鮮征伐島原の亂には、本島の若者その水軍に参加し、之れを以て爾後全國海面漁業勝手たるべしと許されたと云ふ。毛利氏の世に及んで庄屋を置き、本藩に直屬してゐたが、享保十四年、徳山支藩の配下に入つて、明治維新に及んだ。最初富海村に合併したが、明治五年、都濃郡粟屋村外四ヶ村と一小區を作り、同十二年、獨立して戸長を置き、同三十二年、三田尻村に入り、その後防府町制施行と共に、別に一大字となり今日に及んでゐる。

人絹工場

三田尻灣頭、堂々偉觀を現じ、總工費二千萬圓を投じて、善美を盡した大建築に、關西一の大工場を誇る鐘淵紡績株式會社防府工場は、鐘紡傳統の温情主義の旗下に、多數工員が嬉々として立働き、同じく三田尻灣頭、入間川を隔て、鐘紡工場と對峙し、巍然として聳え立つ大建築は、健實主義の大旗下に、優秀技術家と多數工員を擁する福島人絹株式會社工場で、共に市内の二大工場として知られてゐる。

柏木體溫計工場

國産體溫計の嚆矢であり、今や世界的名聲を博して、遠く海外にまで販路を有してゐる柏木體溫計は、先代柏木幸助氏の創製に係るものである。氏は明治十三年頃より、體溫計の製作に専念し、苦心研究の末、同十六年十一月、漸くその實効を収めるに至つた。當時は未だ舶來品全盛の時代で、之れが販路の開拓には並々ならぬ苦心が拂はれた。明治四十三年、英米佛露を視察し、歸朝後益々製品の改良に努め、遂に今日の聲價を博するに至つた。

桑山公園

市の中央に位する小丘である。頂上に立てば、四顧茫々として、白帆の島がくれ行く周防灘の光、廣漠たる防府大平原の景は、隈なく眸裡に入つて、眼界眺望頗る開濶である。最近二萬餘圓の巨費を投じて、或は鑑賞花木を植栽し、或は數條の登山道路、數ヶ所の展望臺を開設し、或は林間ドライブウェイを新設し、或は四阿を配しベンチを置く等、全山の公園施設を完成して、一大遊園地と化するに至つた。



桑山公園展望臺

桑山の名は古くより傳はつて、今川貞世の紀行「道ゆきぶり」にはその西南にさしむかひて、一重の松山のはべるをくはの山とぞいふ。麓に松原遠く並立て、あたりはかた濱とて、しほやく所なり

花薄まそほの糸をみだすかな、しづがかふこのくはの山風

とある。吉武康和の撰文仁井令桑山八幡神祠には「聖武帝の神龜三年春、山西忽ち奇木四十八枚を生ず。民庶之れを異み、議して以の桑の字となす。遂に山に名づく」と云ふ」とある。もとより口碑に依つたものである。

來目皇子殯殮地 頂上に擊新羅將軍來目皇子の殯殮地がある。皇子は用明天皇の第三皇子で、聖德太子の御弟君に當らせられ、推古天皇十一年、新羅征伐の途中、筑紫に於て薨じ給ひ、娑婆の地に殯し、後に河内國に本葬せられた御殯殮地は、桑山東方中腹塔の尾に在つたが、久しくそれ

と知られず、天明五年、英雲公その地に納涼臺を建てるとき、古墳に掘り當て、種々の副葬品が現れ、貴人の舊塚であると判り、鏡一面だけを残して、その他の古器は石匣を新造して納め、山嶺に移して小祠を建て、鎮祭した。明治三十五年十月來目皇子の御殯殮地と決定し、宮内省の所管に屬することゝなつた。

野村望東尼墓 西麓には女流動王家野村望東尼の墓がある。尼は福岡の人、幕末の際、或は奮然自ら起ち、或は志士の陰に在つて活躍した女傑である。福岡に佐幕論起るや、姫島に流され、居ること一年餘、高杉晋作に救出され、來りて數日馬關・山口に滞在した。次いで薩長聯合軍の出發せんとするや、三田尻に來つて荒瀬致和の家に住し、天満宮に參籠し、殆ど食を絶つこと週日、以て一行の福を祈願した。之れが爲め遂に感冒を疾みて、あはれ此の地に客死したのである。時に慶應三年十一月六日、享年六十二。明治二十四年、正五位を贈られ、墳墓重修の際には、畏くも皇后陛下より五十金を下賜せられた。幽宅安く、忠魂長へに皇居のいます東天を望んでゐる。

招魂場 甲子役・四境役等に忠死した五十三士の招魂墓は東麓に在つて、英靈はとことばに邦家を護つてゐる。慶應元年、御楯隊及海軍局の將士が相謀つて、同年九月十五日、土工を起して之れを開き、文久三年六月の馬關海戦以來、各地に戦歿したものゝ遺骨を收めた所である。明治初年、兵制を

革めて諸隊を解くや、藩に於て之を祭り、廢藩の後は、朝廷之れを祭り、縣官をしてその典を司らしめられたが、後に至つて國庫より祭祀料及神饌料を下附して、縣官の派遣を廢して今日に及んでゐる。九月十五日を以て官祭の例日とする。昭和十四年三月、内務省令を以て全國に護國神社の制を定められるや、同招魂社に明治以後の各戦役戦死者並公務殉職者の英靈を合祀して「桑山護國神社」と改稱し、毎年五月十日を臨時大祭日と定めて、市に於て之れを祭ることとなつた。

防 府 放 送 局

コ ー ル サ イ ン J O U G

桑山西嶺北麓の勝地を占めて瀟洒な局舎と、仰ぎ見る山上二基の大鐵塔の偉容に誇る防府放送局は、全國四十一番目の放送局として、昭和十六年四月十九日開局し、一般文化傳達並内外宣傳機關とし、將又電波國防の一據點として活潑なる活躍をなすと共にそのローカル放送に依つて、地



防 府 放 送 局

方文化の向上普及に、大なる貢献をなしつつある。映畫文化と共に、新世紀文化の双璧と稱せられる放送文化の本源たる放送局を持つは、市の大なる誇の一つである。尙同放送局は、放送局としてのあらゆる施設を完備してゐるが、局内演奏室の外、別に山口市に山口演奏所を設置してゐる。

鞠生松原

幾百年を経たかと思はれる老松柯を交へて、立ち續く白砂に、緑の色も一入映えて、松籟千年の昔を語るが如くである。此處はその昔、嚴島明神の天降りました地と傳へ、林中に嚴島神社が祀られてある。安藝の宮島は、後に至つて此處より遷したものと云はれる。

此の松原はもと高洲の松原といつた。天中六年、將軍足利義滿は、讃岐の細川頼之を訪ね、それより安藝の宮島に詣で、更に九州を巡視せんとして、三月十三日、松原の旅館に入つた。館は大内義弘の構築したもので、義弘は降松まで義滿を出迎へて隨行した。翌十四日、義滿以下の乗船凡そ百餘艘は、鞠生浦を解纜した。義弘も御供した。然るに途中海波荒れて、引返す外なきに至り、義滿は傳馬に乗つて義弘を供にし、只一人田島に上陸して、民家に一泊した。十六日には九州行を斷念して、再



鞠生松原

び松原の旅館に宿し、十七日は滞在し、十八日朝出帆して東歸の途に就いた。義弘は隨行して京都まで見送つた。

此の時義滿に隨つた今川貞世の「鹿苑院殿嚴島詣記」には天中六年、この國の國府の南、高はまといふ浦ばたの三田尻といふ松原に、御旅所を立てたり。此の松原は、そのかみ嚴島の明神、爰に天くだりまして、今の嚴島にはうつらせ給ひければ、げにも神さびたるなり。しろがねをしけるやうなるいさご、西東の洲崎の中を、入江のやうに、二筋ばかり、しほさしいりて、浦松のいたく木高からで、枝さしおいかゞまりて、木だちつくうへるやうなる、むら／＼おひて、その中に御社の舊りたるぞお

はします。

まつ原やか洲の木すゑこゆるまで

月の出じほのふけにけるかな

云々とある。

これより前、建徳二年、今川貞世は九州探題となつて、二月二十八日京都を發し、九月二十四日防府に着いて、十月七日防府出發西下したが、此の時の紀行「道ゆきぶり」には

その西南にさしむかひて、一重なる松山の侍るを、くはの山といふ。ふもとに松原とをく並て、あたりはかた濱とて、しほやく所なり。

云々となる。道ゆきぶりにはかた濱とあり、後に書いた嚴島詣記には高濱とある。何れか上下に誤つたものであらうが、その何れが正しいかは判明しない。

聖蹟

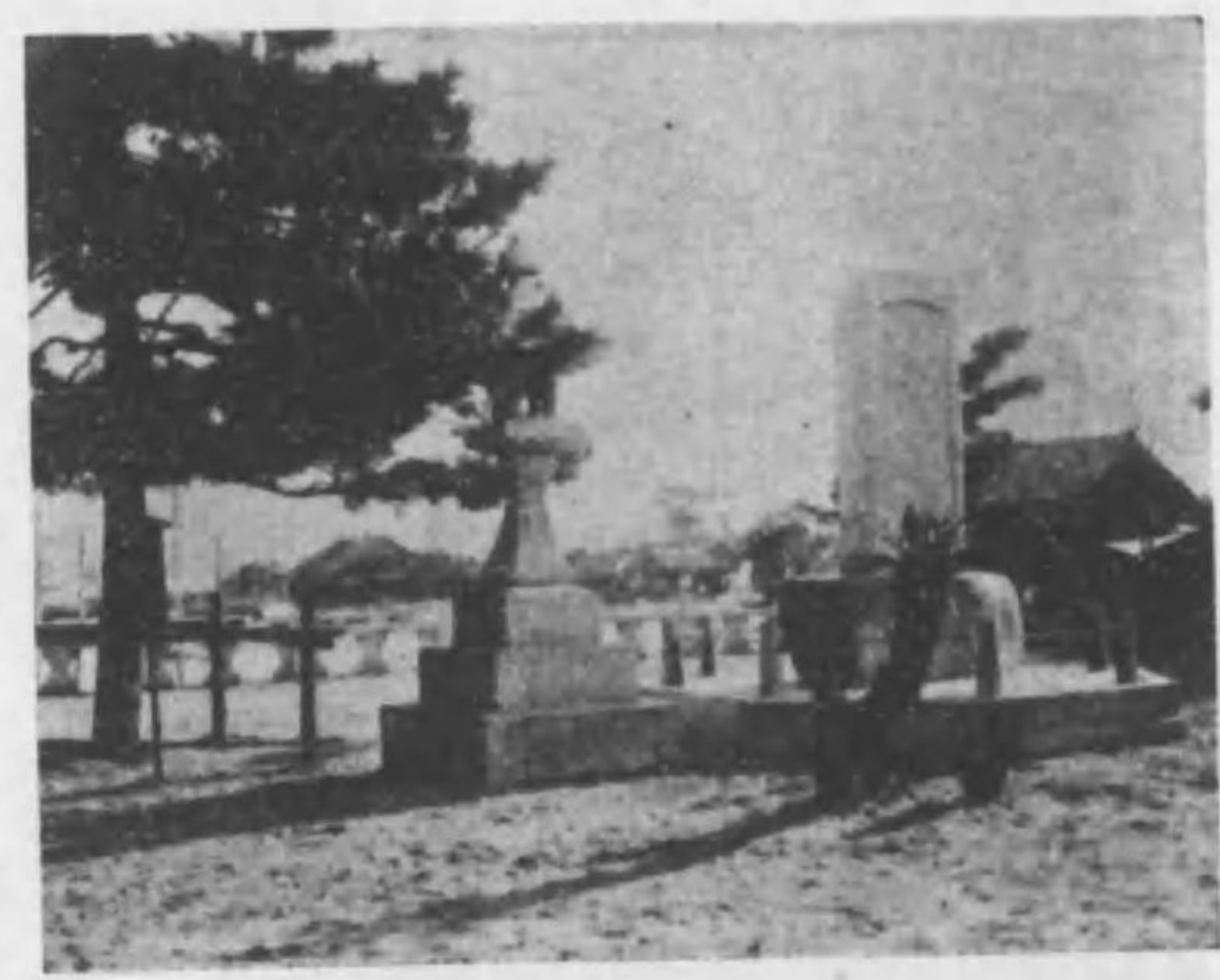
問屋口

明治十八年、明治天皇本縣御巡幸の際、七月二十九日、こゝより御上陸遊ばされ、同所重村喜六宅（宮市屋）に御休息の後、毛利氏別邸に成らせられ、更に山口市に行幸し給ひ、同月三十一日、此の地より御乗艦遊ばされた聖蹟である。今記念碑の建てられてゐる所は、當時の御休息所跡で、昭和十二

年七月三日「明治天皇問屋口御小休所跡」として文部省より史蹟に指定せられた。

大觀樓

大觀樓は、毛利氏元の三田尻別邸の一部である。邸は毛利重就（英雲公）が、その隠居所として構築し、參觀交代の際、休息所とせられたもので、通稱を「御茶屋」といふ。結構宏壯、邸内古松高く空に聳え、今猶舊幕時代の面影をといめてゐる。文久三年、三條實美以下七卿が、その西竄に當つて、暫く滞留したのは、この邸で、明治十八年、明治天皇本縣行幸の砌、問屋口に御上陸御小休の後、蹕を此所に駐め給ひ、次いで山口市に至り給うた。昭和九年十一月一日「明治天皇三田尻行在所」として文部省より史蹟に指定せられた。邸は昭和十四年、その敷地並附近の土地と共に、毛利家の無償譲渡に依り、今は市有となつてゐる。因に招賢閣は今のお茶屋の後方、即ち三田尻病院の直ぐ南隣に建てられてあつたもので、文久三年長藩が攘夷を實行するや、平野



(口屋問) 碑 蹟 聖

國臣その他諸藩の志士の來りて投ずるもの多く、此所に宿泊せしめたもので、宛然攘夷討幕策謀の中心地たる觀があつた。仍つて招賢閣と名づけたのである。

椰別邸

毛利公爵邸の項に詳記してある。昭和九年十一月一日「明治天皇多々良行在所」として、文部省より史蹟に指定せられた。

中關港

向島小田半島と西泊とに擁せられ、水深く陸岸近き天然の良港で、六千噸級の汽船は、陸岸數町の所に碇泊することが出来る。原鹽・再製鹽・鹽田製鹽の移出入多く、最近の統計は、一ヶ年の出入船三萬五千隻、貨物發送約五百萬噸到着五十萬噸に上ることを示してゐる。近年一部の修築を加へられたが、豫ねて懸案の臨海鐵道實現の曉は、一層その特性を發揮するに至るであらう。

中關は、往昔、周防灘東西三十八里を以て、約十八里宛を距て、下關・中關・上關の三ヶ關と稱したもので、一つで、舊藩時代毛利氏産業助長の所謂御撫育機關を此所に設けて、その附屬の越荷倉と稱する宏大なる倉庫數

棟があり、係の藩吏常勤して地方産業資金の融通、倉庫事業の經營に當り、舊藩産業上の一大樞要地であつた。故に當時北陸地方を始め、各地に食鹽運搬その他の所謂千石船の乗員各地より來集する人々に、慰安を興へる爲め演劇興行の三業地に指定せられ、千兩芝居を見んとするものは、下關を除いて皆此所に來集し、頗る股盛を極めたものである。

三田尻鹽田

古濱・中濱・鶴濱・大濱に分れ、それ等の鹽田は入川を隔て、彼此相接してゐる。總面積二百二十七町餘歩、製鹽業者七十九名百十七鹽戸、従業員二千名に近く、一ヶ年の生産二千五百萬キロ之れが賠償價格は百七十萬圓に達し、二等鹽の生産六割を占め、一等鹽之れに次いで三割、三等鹽一割の比を示してゐる。

三田尻鹽田の濫觴は、古く慶長の昔に在るが、その後七十餘年を経て、藩主綱廣公、貞享二年、工を起して、吉就・吉廣兩公を経て、元祿十二年、古濱鹽田の開墾を竣へ、次いで中濱・鶴濱・大濱の修築が成つたのである。

爾來、その業大に進んで收穫増加し、需要を超過する巨額に及んで、享保年中に至り、搨民競賣を始めるに至つた。寶曆中、藝州の人三原屋貞右衛門をいふもの、此の弊を矯めんとし、その夏秋鹹水の濃度に差異あることの發見に基き、毎年二月より九月まで操業し、十月より一月まで休業する定めを設けて、生産の調節を圖つたがその後狡猾なものが出て、陽に休業し陰に持濱をなして、獨り利を貪らんとした爲め、一般に休業を廢して、益々生産過剰を來し、いよいよ搨業の衰微を招來するに至つた。之れを寶歴庚辰の瓦解といふ。

明和の初年に至つて、その衰微はいよいよ甚しきに至り、搨田を放棄して去るものが續出した。藩公は之れを憂へて、搨田救済維持法を講じた。田中藤六が諸州の搨業を視察して、三八法さんぱちほふ（三月始業し八月止業）を提唱しいづくしまくわい、搨會を創始したのは此の頃のことである。

安永七年三月の頃より、從來の薪を廢して石炭を用ひるに至つた。最初高千帆村の有帆炭を使用したのが、その供給に不足を生じて、搨價の騰貴を見るに至つたので、筑前炭を採用するに至つた。斯くして漸く生産の調整を見るに至つたが、文化元年三月、三十日の延業をした。之れを文化丙寅の瓦解といふが、之れは大した結果にはならなかつた。

これ等の鹽田は、寶曆年度に殆ど壞敗したので、英雲公藩吏をして中濱・鶴濱の堤防を築かしめ、明和三年大濱七十五枚の鹽田を築造せしめた。此の時堤防を築けば築くに從つて崩壞し、之れが爲め奉行某、公の忌諱に觸れて遠流に處せられたこともあつた。



三田 尻 搨 田

その後の搨田に就ては、大した異變もなかつたやうで、三八法は依然として繼續實施せられて來た。その他各濱に地主會たる會所が設けられ、次いで各會所を統一して大會所が設けられた。現在は大會所の外に、搨業組合も設けられて、搨業の發展上に種々畫策講究が行はれて居り、持濱は三月一日開始し、十月末日を以て終り、生産の少なかつた場合には、一ヶ月位延濱をなすことがある。

岸津鹽田は、寶曆六年、英雲公の江泊開作に依つて出來たもので、面積三十二町歩、製鹽業者十七名、昭和十五年總工費十七萬八千圓を投じ、縣下のトップを切つて、田井式蒸汽利用製鹽釜に依る合同煎熬工場を建設した。年産額

三百萬キロ、賠償價格二十五萬圓に達する。

西浦鹽田は、面積六十七町歩、天明七年英雲公撫育金の中をその費に充て、開作築造したもので當時は面積五十一町七段餘歩であつた。製鹽業者三十名三十四鹽戸、賠償價格五十三萬圓に達する。

向島製鹽工場

鹽專賣法の實施と共に、鹽田の管理、鹽販賣の經營を司る廣島地方專賣局防府出張所は、三田尻鹽明治三十八年、三田尻鶴濱の地に設置せら務局と稱して、れ、その後專賣局三田尻收納所、三田尻專賣支所、三田尻地方專賣局と變遷して來たが、大正十二年廣島地方專賣局に合併せられ、その出張所として現在に及んでゐる。

廣島地方專賣局防府製鹽工場は、向島洗川の地に在る。大正六、七年に亘つて、天候不良の爲め内地製鹽の減收を來し、加ふるに歐洲大戰の影響を受けて、化學工業勃興し頗にその原料たる鹽の需要を増加して、その供給に不足を生ずるに至り、政府は青島・關東州・臺灣等より天日鹽を移輸入してその再製を企劃し、大正七年起工、その直營工場を設置したのが、本製鹽工場である。その後海水濃縮装置の工場を増築して、總工費二百六十萬圓を投じてゐる。一ケ年の生産は、平釜式製鹽(二等鹽)七百萬キロ、真空式製鹽(一等鹽)千七百萬キロ、精製鹽二百五十萬キロに上つてゐる。海水濃縮装置は、未だ世界に比類なき獨特の設計と、尖端的機械に依るもので、海水を濃縮して、一日一千石の

採鹹をなし、之れに原鹽を混和して、製鹽を行つてゐる。同工場は、最初廣島地方專賣局防府出張所の管理に屬してゐたが、昭和十四年獨立して、同地方專賣局の直屬となつた。

專賣局試驗場

全國唯一の專賣局防府試驗場は、三田尻鹽田中濱なかはまに在つて、明治四十二年設置以來、改良カナワ式製鹽法・真空式製鹽法・S T式製鹽法の試験を始め、撒砂の性質・沼井構造の改良・鹽田地盤の改善持目時刻・タナカ流採鹹法等の研究、鹽化加里臭素等の副産物の製造研究等を行ひ、製鹽法の改良上に尠からぬ貢獻をしてゐる。

立岩稻荷

向島赤崎あかきに在る。與三郎狐と一對の幸之進狐の傳説に名高く、非公認社ではあるが、靈驗特にあら



立岩 荷稻

たかなりとして崇敬者多く、年中賽者踵を接する。殊に陰曆二月の初午は、頗る賑ひを呈し、山路は絡繹として賽者相踵ぎ、社前の海上は、九州・四國・内海各地沿岸地方參拜者の大小船舶を以て埋められ、海岸一帯には露店相並び、春光麗かな内海の絶景を賞しつゝ、山腹又は干潟の岩礁上に宴を張るものが多い

◆豆狸 向島は一名を蓬萊島といひ、周圍四里九町餘、本土と一衣帯水を隔てゝある。同島棲息

のタヌキは、大正十五年、天然記念物保存法に依り指定せられた。同島南岸は鰻魚よく繁殖して、赤崎・黒崎・田津鼻あたりにはアマチュア漁家の來遊するものが多い。又同島は雉・山雞の棲息多く、農林省の許可を得て、大正十五年一月より獵區の設定をなし、好獵家の來るものが多い。―獵區入場料、一日一人五圓―

水産試験場

漁撈養殖に關する各種の試験及調査並に小型發動機三等機關士の養成を事業として、本縣内海水産業並農山村に於ける淡水魚族養殖の指導啓發に任ずる山口縣水産試験場瀬戸内海分場は、大正十一年設立以來三田尻港口に在つたが、附近の工場地帯化に依り、汚水の影響を受けて、養魚池の使用不能指導船繫留の不便に陥り、昭和十六年度中に中浦漁港口に移轉することとなつた。同場は大島・玖珂・熊毛・都濃・佐波・吉敷・厚狹の各郡及内海に面する豊浦郡の一部並に徳山・防府・宇部の各市を含む瀬戸内海一圓を管轄區域とし、指導船多々良丸は、十九・八六噸六十馬力十二哩の時速を有する精銳で、兼ねて漁業取締並水難救護の任に當つてゐる。同場の一事業たる小型發動機の檢診修理並に同巡回診療は、全國に魁けて開始せられた施設で、海上の鐵工所と稱せられる巡回船厚生丸は、十八噸十五馬力時速七哩で、船内に發動機の檢診修理施設を行つて居り、一般漁業者の福利増進に貢獻する所頗る大なるものがある。又同場は、佐波郡島地村に千三百餘坪の淡水養魚池、右田村勝坂に八十餘坪の鮎の池中養殖池、阿武郡吉部村に五百九十坪の養鱒池を持ち、右田村を除き、事務室・倉庫・調餌室等の設備を行ひ、淡水魚族の養殖試験上大に氣を吐いてゐる。

西浦港

佐波川河口に位し、小茅山・赤石山に擁せられて、港内廣く波浪平穩、風光また明媚の良港である。食鹽・農水産加工品・石炭・肥料等を移出入品の主なるものとする。港口に沿ふ廣漠たる平地は、將來の工場地帯として、豫約せられてゐる。

◆魚ひめあやめ 小茅新立の地に自生する。自生用限地帯として、大正十四年、天然記念物に指定せられた我が國に於ける原始あやめは、此處に限つて自生するので、アジア大陸と九州・本州・四國との地理學的變遷の研究上、重要な参考資料となるものである。

市役所

市の行政廳たる市役所は、市の中央地點車塚に在る。行政事務を庶務・振興・會計・稅務・農林・商工水産・教育・兵事警防・厚生・土木・戶籍の十一課に分つて處辨し、三田尻魚市場・同宮市支場青果市場・常設家畜市場・第一公益質屋・第二公益質屋・防府中關西浦の三傳染病院・窮民救護所

大平莊・葬儀所・火葬場等の市營各種機關を管轄し、商業學校・實踐女學校・青年學校・水産青年學校及國民學校十校を管理し、百五十餘名の吏員は、新興都市發展の原動力となつて、各々その職務に専念精通してゐる。本市の歳入出豫算は、一般會計百五十萬圓、特別會計二十五萬圓を普通とする。尙西浦に市役所出張所が置かれてある。

古墳

市役所の前に老松の茂つた小丘がある。圓く盛られた土山が、二個續いて瓢形をなし、何れも南に向つて岩洞がある。前方後圓式古墳の比較的よく原形を保つてゐるものである。岩洞は掘り出された墓穴であるが、與三郎狐の地方傳説に依つて、今その一つに稻荷神を祀つてゐるのは滑稽である。誰人の墳墓であるかは詳かでないが、その規模より見て、貴顯又は豪族の墳墓であることは明かである。古墳の形態に



防府市役所



墳古塚車

因んで、此のあたりの地名を車塚といつてゐる。此の外鑄物師及多々良には圓墳があり、天神山より多々良山卒禮山の山麓地帯及田島山の古墳、黒山及女山の群集古墳、市外石田村高井の古墳など、何れも土着豪族の残したもので、之れに依つて見るも、如何に防府地方一帯の地が、早くより文化の開けてゐたかを證するに足ることが出来るのである。

山陽花壇

青葉若葉の天地となつて、地上悉く觀るべき花を失つた時、獨り色とりどりに咲き競ふは、花菖蒲である。

山陽花壇は、三田尻驛前に在つて、小林氏の菖蒲園である。大正十三年、僅か七鉢の鉢植を置いた

のが本花壇の起原で、翌十四年より植込みに着手したが、當時未だ漸く面積三十坪、花の種類も五十數種に過ぎなかつた。爾來拮据經營十有餘年、今は六百坪の廣きに及んで、五百餘種の珍花を有してゐる。而もその間東京武藏園・吉野園を始め、熊本その他の著名園より名花珍種を移植したが、今はそれ等を陵駕する優秀花を揃へて、出藍の譽を高うしてゐる。昭和十年七月には、明治神宮に遊舞の袖外四十一種を獻納の光榮に浴した。



園蒲菖

園内五百有餘種の花は、一々名稱を有してゐるが、最も珍種として貴ばれるものは、舊對州藩公秘藏の王冠を始め、濱の宮・水蓮・不知火・濱の松風・馬上の使・新杜鵑等で、これ等は何れも頗る高尚且つ優秀なものである。未だ名稱を有せぬ新花も數種ある。

園内には小亭茶室を設け、池を穿つて鯉魚を養ひ、風趣なか／＼豊かに、花の頃には電飾を施して夜間の鑑賞に便し、來り遊ぶものが多い。園は先代藤五郎翁の創設に係り、その昭和十四年秋歿する

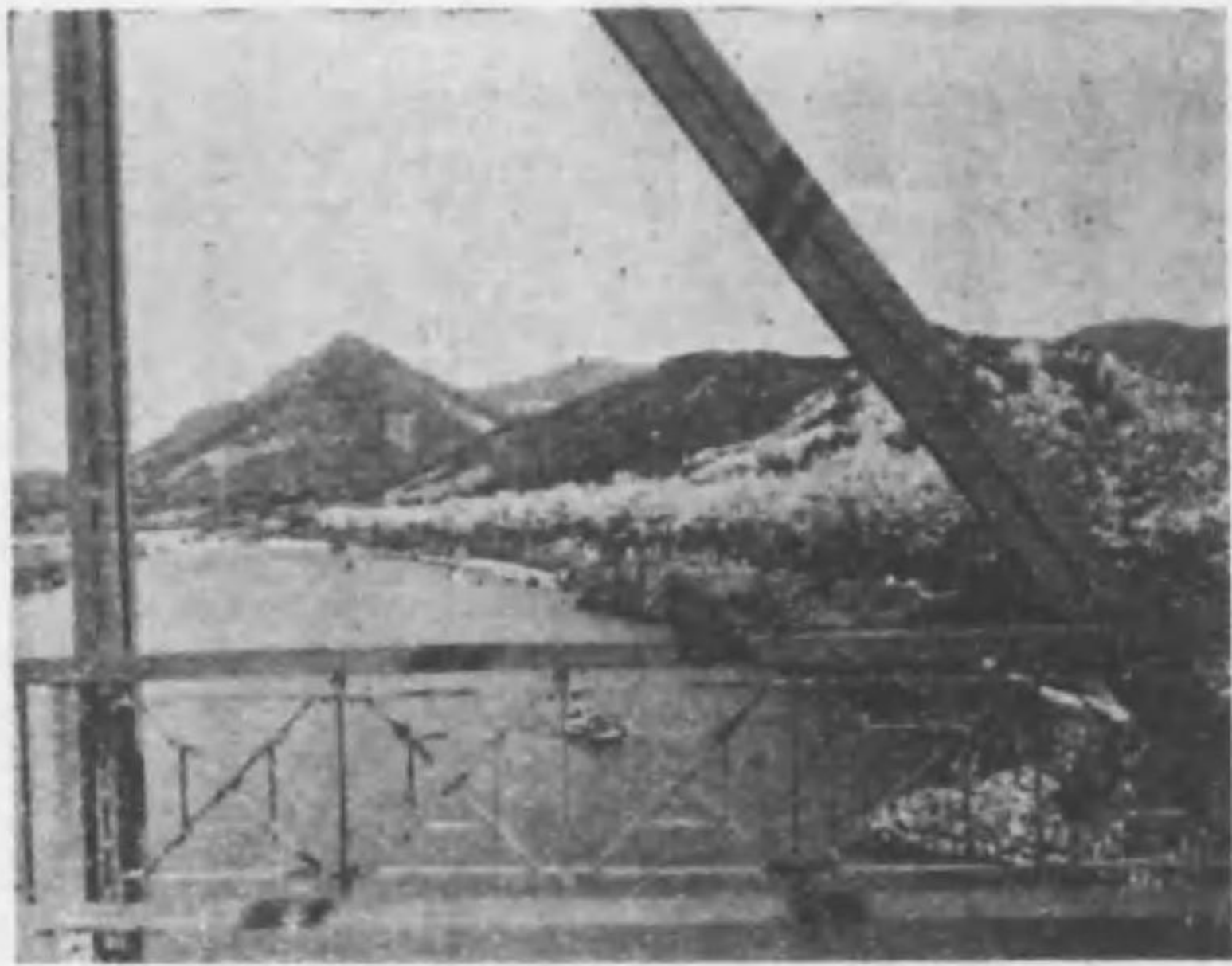
に至るまで、心魂を傾倒して經營に當り、遂に防府名所の一たらしめるに至つたものである。

繭 檢 定 所

産繭處理統制法に基く繭の檢定格附を行ふを事業として、昭和十三年設置の山口縣繭檢定所は、此の種施設の縣下唯一のものである。繰絲及檢定並生絲検査に關するあらゆる設備を完備して、年間六百五十件の檢定鑑定並全國共通的に繭の格附研究を行ひ、併せて檢定員の養成、檢定期間外に屬する空間を利用して、研究原料繭に依る檢定格附に關する試験研究等を行ふ。

新 橋 と 櫻

新橋は防府名所の一つである。橋は宮市の繁華街本通を経て、佐波川を渡り、山口市に通ずる新街道に架せられた鐵橋である。屢々架設せられた此の橋は、大正七年七月の大洪水に流失して、同十年五月、現在の鐵橋に改められたものである。こゝは山口街道（山口玖珂線）小郡街道（二號國道）石州街道（防府津和野線）の分歧點である。



新 橋

堤防には橋の袂より白坂淵のあたりまで、數町の間に亘つて櫻樹が植ゑられ、花時橋上に立つて眺むれば、花雲遠く棚引き、水の底にも亦花が咲き、堤上を進めば花のトンネルを行くが如くで、眞に縣下有數の櫻名所である。花は更にその名も似合ひの櫻町を経て、天満宮春風第一樓前より、遠く神社境内天拜山までも植ゑ連ねられて、陽春開花の候には、美しくも防府市街の北邊は、全く霞舞たる花雲を以て圍繞せられる。

此處はまた螢の節も面白く、夏季は町の人々の納涼場となり、そよ吹く川風の涼を趁うて來るものが多い。橋の袂の宮島社の下花火は、天満宮誕辰祭及三田尻住吉神社の仕掛花火と共に、その名を謳はれて、防府名物の一つとなつてゐる。

△ 船橋址 船橋は防府市宮市より山口市に向ふ舊街道の途中、佐波川上に五艘の舟を浮べて、その上に橋を架し、人馬が往來する奇橋であつたが、時勢の進運は、二百年の歴史に輝く名橋も、昭和十六年五月、該所より

約五十米の下流に當り、現木橋の架設に依つて撤去せられ、遂にその姿を没するに至つた。昔此の地は久しく渡船に依つてゐたが、右田城主毛利隆春、毛利輝元の命に依つて架橋し、後に寛保二年九月、毛利重就之れを船橋に改めたものであるが、今は橋の袂の遺跡に依つて、僅かにその面影を存するのみである。

この邊りは毛利氏の古戦場である。嚴島に陶晴賢を誅した毛利元就は、漸次防長經略の歩武を進めて、山代・八代・覺頭庄沼城・若山城を攻略し、弘治三年三月十二日、浮野峠に進んだ。此の時天神山には、大内義長の部將鷲頭隆政・朝倉弘房の兩將が二千の兵を率ゐて固めてゐた。毛利勢は穴戸隆家・福原貞俊・志道元保・口羽通良等を先鋒として、元就・隆元これに續き、海邊の別道よりは、小早川隆景等が進撃した。隆政・弘房は之れに辟易して、戦はずして山口に潰走した。先鋒の穴戸・福原・志道・口羽の諸將は、敵を佐波川の邊に追ひ詰めて躰にした。山陰道を進んで大内氏の軍を北より壓迫した石州三本松（今の津和野）の城主吉見正頼が、松崎神社の大專坊に元就・隆元父子と會して、巨禮を執つたのは、その旬日の後であつた。



橋 船

その他の史蹟名勝

形勝の地勢、溫和の氣候、天惠豊かに、而も千年の古都として、政治文化交通の中樞地點であり、その文獻に徴し得べきものゝみでも、既に千八百五十有餘年の古き史實を有する防府の地の名勝史蹟は、實に枚擧に遑がない程であるが、既に記したものゝ外、その主なるものを略記すれば、凡そ左の如くである。

- ▲大專坊舊址 松崎神社別當大專坊の建物は、今の同社社務所である。（船橋の項参照）
- ▲園樂坊址 松崎神社舊社野の一で、大内義隆發遣の入明別使策彦周良を始め、石田三成・細川幽齋等、名流の宿泊したことがある。
- ▲宮市觀音 永祿年間、開山心譽上人の感得に依つて安置したので、恵心僧都一刀三禮の作と傳へる三十三體觀音が安置せられてゐる。
- ▲佐波神社 仲哀天皇の熊襲御親征に當り、御建立遊ばされた由緒深き宮で、西（金位）を切るの意から金切の宮と稱せられた。祭神は天照大神外十三神で、往時は國司代拜の總社であつた。
- ▲茶臼山 浮野峠中央南方に在つて大内輝弘が毛利氏に攻められて自刃した所で、鐙掛松がある。
- ▲越氏塾址 三田尻上の町と船頭町とに在る。塾は河坊養哲の開創したもので、多數の碩學が輩出した、享保十二年

養哲歿し、官はその遺志を容れて郷塾とした。
 ▲南部伯民舊邸 三田尻老松小路に在る。伯民は醫を小石大愚に學び、儒は皆川淇園に従ひ、又菅茶山の門に出入した。白河樂翁侯に聘せられてその侍醫となつた。文政二年、頼山陽中關に滯留中、伯民を訪うて詩文を作爲し論説したのは、此の邸である。
 ▲老松神社 白雉三年の建立で、素盞鳴命・大己貴命・天穗日命を祭神とし、その後菅公の母吉祥女と菅公を合祀し、娑婆氏の氏神として、須佐神社と稱した。貞觀十四年改稱して老松神社といふ。
 ▲大平山 標高三六一米(二千八十二尺)餘登山道路が開通して、四時登山者が絶えない。當地方の最高峰で、遠く九州四國の山々を望み、周防灘の絶景を一眸の裡に收め、山口・徳山・佐北地方までも遠望することが出来る。
 ▲有時庵址 新前町に在る。田中彦七の別荘であつた。文政二年四月、頼山陽は此の庵に入つて、留滞一ヶ月に及んだ。

市外觀光地

國幣 玉祖神社 (周防一宮)
 中社



社神祖玉

市外石田村大崎鎮座。前に佐波川の清流を控へ、後に霞山・佐野山の翠巒を負ひ、境内森嚴整肅の靈域である。祭神は三種の神器の一八坂瓊曲玉を造り給うた玉祖命外一座である。玉祖命は後に此の大崎の地に座して、中國を平定し給ひ、遂に此の地に薨じ給うたと傳へ、今社邊の玉の岩窟といふはその御墓であるといふ。當社の創立は太古に屬して、その年月は未詳であるが、祭神御終焉の地であるから、蓋し紀元以前のことであらう。

景行天皇、熊襲征討の爲め御西下の時、當社に祈願し、寶劍を寄せられた。宮城の森といふは、その行在所の跡と傳へてゐる。仲哀天皇神功皇后も、亦御西征の砌御參拜あつて、澤田の長をして、高田(姫山の麓)の土を以て、三足の土鼎及盎を作らしめて、神供を奉り給うた。澤田の長は當地佐野燒(玉祖燒)の始祖で中頃は土田といひ、今は内田といひ、今にその子孫闕如なく業を繼ぎ、毎年九月二十五日の例祭には、古例に依つて調進し、土鼎を以て饗を炊ぎ

盃に盛りて奉るを例とする。例祭の前夜行はれる占手神事は、此の時天皇が吉凶を社前に占はしめ給うた故事を、今に傳へるものである。源義經が平家追討の戦捷を祈願して奉納した吉包の太刀、建久六年俊乗坊重源當社建立目錄、建武二年大内弘幸當社重建目錄、足利尊氏が九州より進發の折奉納した猛房の太刀等、多くの寶物が藏せられてゐる。

祭神は玉石琢磨の技術を傳へ給うた神であるから、寶石眼鏡業者等は、その祖神として崇敬し、毎年四月十日の眼鏡祭には、大阪・京都・名古屋・東京・九州方面及近縣各地より業者及眼鏡を用ひる老若男女が、多數參拜して賑ふ。

富海海水浴場

市外富海村に在る。遙かに豊豫の山々を望んで、風景絶佳に、江泊杵崎兩半島に擁せられて灣入深く、而も遠淺であり、海底の眞砂は清らかに、加ふるに交通の便を以てし



富海海岸

て、海水浴場としてのすべての條件を具備せること、實に縣下第一位である。貸家・貸間・貸ボート休憩所・賣店を始め、夜間海岸の電飾等、あらゆる娛樂休息の機關が整へられてゐる。

佐波川峡谷

防石鐵道及同鐵道經營のバスに依つて、清流佐波川の峡谷美を縫うて上れば、川は水量豊富にして或は急湍を走らせ、或は碧潭を湛へて、而も流水縣下稀に見る清麗で、兩岸幾多の溪流には、隨所に瀑布を懸け、兩側の山容亦頗る秀拔で、春は山野の萬花に、夏は滿山の青葉に、秋は滿地の紅葉に、冬は落葉の灌木林に、車窓の眺めも豊かに、大に旅情を慰めるに足るものがあり、四時の遊眺によろしい。殊に奥地に進むに隨つて、景天飛び、河鹿鳴き、山葵を産し、鮎も美味を増し、涼冷の山氣と相俟つて、夏季の清遊に適する。

佐波川沿岸一帯の地が、俊乗坊重源の遺跡傳説に富めることは、別項阿彌陀寺の條に記したが、その他文永十一年七月、國主大内弘貞の感得に依つて安置した右田岳の觀音、源頼朝の手植と傳へる大銀杏があり、同頼朝を開基とする名刹天徳寺、婦徳萬古に輝く長藩の碩儒瀧鶴臺夫人生誕地、足利尊氏

豊臣秀吉に關係ある縣社三坂神社、周防二の宮縣社出雲神社、庄方觀音、申文珠、上村藥師、明治の傑僧島地默雷の記念館、長者ヶ瀨の奇勝、靈峰白石山、千古の密林三百町歩に及ぶ滑官林等々、名勝舊跡の數々がある。

市内の神社佛閣

(一) 神社

- 縣社二——郷社四——村社一一——無格社四——
- ◇縣社 松崎神社(宮市)
 - ◇縣社 佐波神社(惣社)
 - ◇縣社 老松神社(新丁)
 - ◇縣社 嚴島神社(中浦)
 - (鞠生松原)
 - ◇無格社 天御中主神社(車塚)
 - ◇無格社 矢立神社(野島)
 - ◇郷社 玉祖神社(中浦)
 - ◇村社 嚴島神社(中關本町)
 - ◇村社 鹽竈神社(同上)
 - ◇村社 磯崎神社(新前町)
 - ◇村社 嚴島神社(向島)
 - ◇郷社 玉祖神社(木船)
 - ◇村社 和立海神社(大西)
 - ◇村社 金切神社(石崎)
 - ◇無格社 鹿角神社(女山)
 - ◇村社 仁井令八幡宮(古谷河内)
 - ◇村社 植松神社(中河内)
 - ◇村社

(二) 佛閣

- 伊佐江八幡宮(伊佐江)
- ◇郷社 春日神社(坂本)
 - ◇村社 江泊神社(前町)
 - ◇無格社 岸津神社(岸津)
- 真宗一五——真言宗五——浄土宗二——曹洞宗一〇——臨濟宗一——黄檗宗一——法華宗一——
- ◇曹洞宗 護國寺(中河原)
 - ◇真宗 福寶寺(高倉)
 - ◇曹洞宗 成海寺(新町北裏)
 - ◇真宗 安養寺(新町)
 - ◇浄土宗 定念寺(中市)
 - ◇真言宗 滿願寺(櫻町)
 - ◇臨濟宗 蘆樵寺(前小路)
 - ◇真宗 萬行寺(同上)
 - ◇真言宗 國分寺(院内)
 - ◇真言宗 法華寺(同上)
 - ◇曹洞宗 東林寺(國衛)
 - ◇浄土宗 専光寺(下町)
 - ◇真宗 光明寺(青木町)
 - ◇曹洞宗 正福寺(新丁)
 - ◇真宗 明覺寺(同上)
 - ◇真宗 西法寺(三田尻本町)
 - ◇法華宗 法圓寺(高洲)
 - ◇曹洞宗 大樂寺(桑山)
 - ◇曹洞宗 安養寺(西須賀)
 - ◇真宗 萬巧寺(野島)
 - ◇真宗 西福寺(向島)
 - ◇真宗 正善寺(新前町)
 - ◇真宗 普門寺(白濱)
 - ◇黄檗宗 淨福寺(同上)
 - ◇真宗 善正寺(岡城)
 - ◇曹洞宗 玉林寺(中浦)
 - ◇真宗 西政寺(木船)
 - ◇真宗 信行寺(里)
 - ◇曹洞宗 吸江庵(岡山)
 - ◇真宗 光宗寺(大塚)
 - ◇真宗 妙女寺(伊佐江)
 - ◇真宗 法輪寺(大内)
 - ◇曹洞宗 法蓮寺(沖ノ原)
 - ◇真言宗 阿彌陀寺(坂本)
 - ◇曹洞宗 極樂寺(岩畑)

観光コース (三田尻驛起點)

▲一時間のコース 天満宮—人絹工場(三田尻港)—桑山公園—

▲二時間のコース 天満宮—國分寺—國廳址—勝間浦—人絹工場—桑山公園—三田尻鹽田—

▲半日のコース 天満宮—國分寺—毛利公爵家防府邸—阿彌陀寺—農民道場—國廳址—人絹工場—桑山公園—三田尻鹽田—

▲一日のコース 新橋—船橋—藪檢定所—天満宮—國分寺—毛利家防府邸—農事試驗場防府試驗地—敷山城址—阿彌陀寺—農民道場—種雞場—國廳址—勝間浦—人絹工場—問屋口聖蹟(向島を望む)—三田尻鹽田—桑山公園—鑄物師圓墳—車塚古墳—市役所—

▲半日のハイキングコース

★第一コース 佐波川堤防—天満宮—敷山城址—阿彌陀寺—農民道場—勝間浦—桑山

公園

★第二コース 桑山公園—鞠生松原—三田尻鹽田—向島—三田尻港—勝間浦—天満宮

溫 柔 郷

勤勉なる六萬市民と、年間二百萬去來客の勤勞勞務の途上に於けるオアシスたる娛樂並社交機關として、凡そ左の如き設備がある。

料亭並食堂 各々凡そ二十戸ばかりがあり、宮市三田尻兩藝妓券番、並三田尻娼妓券番の設がある。

映畫常設館

★福聚座(野崎)—主として松竹— ★銀映館(天神町)—主として日活— ★中央館(自力)—主として新興大都— ★三田尻東寶映畫劇場(三田尻本町)—東寶—

劇 場

戎座(戎町) ★天神座(前小路) ★新天座(新前町) ★中關座(中關本町) ★稻荷座(郷ヶ崎)

★青木座(西浦新丁)

遊技場

玉突その他數ヶ所

土産品

本市の特産品その他で、ローカルカラー豊かに、土産品として好評を博してゐるものは、凡そ左の如くである。

◆蒲鉾 竹輪 (品質良好、美味無類として定評があり、遠く京阪神地方まで盛んに移出せられ、年産額五十萬圓に及ぶ)

◆鹽味羹 蒲鉾羊羹 煉羊羹 栗おこし ホニホ みめより 白外郎 (特殊の美味と由来とを持つ銘菓)

◆佐波川焼鮎 製造蝦 (河海の各代表的特産)

◆防府人形 (雅味と地方色に富む工藝品)

昭和十六年五月十五日印刷
昭和十六年五月二十日發行

(非賣品)

發行兼 編輯人 防 府 市 役 所

防府市宮市昭和町

印刷人 大 村 完 二

防府市宮市昭和町

印刷所 大 村 印 刷 所

電話 一三五番

415
300

Faint, illegible text within a rectangular border on the right page.

終